

第31回市町村職員外国派遣研修報告書

— 2024 —

公益財団法人 北海道市町村振興協会

【ハイデルベルグ城内（ドイツ：ハイデルベルグ）】

目次

令和6年度市町村職員外国派遣研修の概要	2
研修参加者名簿	4
顧問あいさつ	5
研修記録	6
研修参加者見聞録	24

令和6年度 市町村職員外国派遣研修の概要

1 目的

近年、人口減少や少子高齢化の進行、感染症や大規模災害など新たなリスクの顕在化に加え、地域環境問題への住民意識の高まりやデジタル社会の進展など、市町村を取り巻く環境が大きく変化してきている。

こうした環境の変化や多様化する住民ニーズへの対応が求められる市町村においては、地域行政の総合的な実施主体として、住民との協働による持続可能な地域づくりに向けた取組を、より一層進める必要がある。

このため、国内のみならず、諸外国における地域づくりに関する先進事例の調査研究を通じて、市町村職員の政策形成力の向上を目指すとともに、国際的な視野と識見を有する人材の養成を図る。

2 日程

令和6年10月2日（水）～ 10月11日（金） 10日間

3 対象者

市町村職員で、次の各項目に該当する者。

- (1) 課長補佐（相当職を含む。）以下の職員
- (2) 原則として、3年以上の勤務経験（民間企業等の勤務年数（前歴換算）を含む。）を有し、当該年度における4月1日現在の年齢が50歳以下の者

4 研修テーマ

令和6年度の研修テーマは、市町村が直面している政策課題のうち、次の3分野を選定。

(1) 「環境政策」

近年、気候変動問題への対応は喫緊の課題で、社会全体で積極的に温室効果ガスの排出削減に取り組むことが求められている中、道内市町村においても、地球温暖化対策実行計画の策定が義務付けられるなど地域の特性を生かした再生可能エネルギーの活用や脱炭素に向けた様々な取組が必要となっているため。

(2) 「地域交通政策」

地域の人口減少などを背景として、交通事業者による鉄道や路線バス等のサービス提供が著しく不足若しくは困難な地域が増加しており、市町村自らが主体となって廃止路線等の代替手段を導入するなど、地域交通の確保は、過疎化、高齢化が進行する道内市町村にとっても喫緊の課題となっているため。

(3) 「観光政策」

観光は我が国の成長戦略の柱で、道内市町村においても少子高齢化時代における地域の消費拡大や経済発展にとってきわめて重要な政策分野となっているため。

5 研修日程

日次	月日	時刻	交通機関	摘要	宿泊地
1	10月2日 (水)	19:20	航空機 ホテルバス	道内各空港から、羽田空港へ 各自、無料送迎バスでホテルへ移動 結団式	東京
2	10月3日 (木)	7:20	ホテルバス	ホテル⇒国際線ターミナル、出国手続き	フライブルグ (ドイツ)
		9:40 17:00 20:30	NH223 専用バス	羽田空港⇒フランクフルト空港(フライト時間:約13時間) フランクフルト空港着 ホテル着(ホテルで夕食)	
3	10月4日 (金)	8:00	鉄道	ホテル⇒バート クロツインゲン	フライブルグ (ドイツ)
		9:00		■公式訪問① バート クロツインゲン市役所	
		16:15	路線バス	バート クロツインゲン⇒フライブルク・ヴォーバン地区	
		17:00		ヴォーバン地区の視察	
		18:00	トラム	ヴォーバン地区⇒アルトシュタット地区	
		18:15 21:00		市街地視察 ホテル着(レストランで夕食)	
4	10月5日 (土)	9:30	専用バス	ホテル⇒ハイデルベルグ	ビルバオ (スペイン)
		12:00		ハイデルベルグ城、旧市街視察	
		16:10	専用バス	ハイデルベルグ⇒フランクフルト空港	
		20:40	LH1146便	フランクフルト空港⇒ビルバオ空港	
		22:50 23:50	専用バス	ビルバオ空港着 ホテル着(各自、空港で夕食)	
5	10月6日 (日)	9:30	徒歩	ホテル⇒ビルバオ港	ビルバオ (スペイン)
		10:30		ビルバオ港、ビルバオ市街地視察	
		15:30		グッゲンハイム美術館見学	
		17:00		ホテル着(レストランで夕食)	
6	10月7日 (月)	9:00	専用バス	ホテル⇒ビルバオツーリストオフィス	サン セバスティアン (スペイン)
		9:30		■公式訪問② ビルバオ観光局、ビルバオ市役所	
		11:00	専用バス	ビルバオ⇒ゲルニカ	
		13:00		ゲルニカ市街地視察	
		15:00 16:00	専用バス	ゲルニカ⇒サン セバスティアン ホテル着(レストランで夕食)	
7	10月8日 (火)	9:00	専用バス	ホテル⇒イケルド展望台	サン セバスティアン (スペイン)
		10:00		イケルド展望台⇒サン セバスティアン市役所	
		10:30		■公式訪問③ サン セバスティアン市	
		13:00	徒歩	サン セバスティアン市街地視察	
		21:00		ホテル着(各自、バル街で夕食)	
8	10月9日 (水)	8:00	専用バス	ホテル⇒フランス・アンダイエ駅	パリ (フランス)
		9:34	TGV8534	フランス・アンダイエ⇒フランス・パリ	
		14:10	専用バス	パリ市街地視察	
		23:45		ホテル着(クルーズ船で夕食)	
9	10月10日 (木)	15:00	専用バス	パリ市内施設見学、市街地視察	機内
		19:30	NH216便	ホテル⇒シャルルドゴール空港 シャルルドゴール空港⇒羽田空港(フライト時間:約13時間)	
10	10月11日 (金)	15:55		通関後、解散 羽田空港⇒各道内空港へ (※一部の参加者は12日(土)に移動)	

※NH:全日空(ANA)、LH:ルフトハンザドイツ航空、TGV:フランス国鉄の高速鉄道

市町村職員外国派遣研修参加者名簿

区分	氏名	所属等
顧問	小 磯 修 二	(一社) 地域研究工房 代表理事 北海道文教大学地域創造研究センター長
団 長	柏 木 文 彦	(公財) 北海道市町村振興協会 常務理事・事務局長
副団長	西 出 楽 汰	(公財) 北海道市町村振興協会 事業推進担当・主査 (中富良野町派遣)
事務局	高 根 健 太	由仁町 建設水道課上下水道担当・主査
1 班	木 村 俊 輝	奈井江町 町立国保病院総務係・主事
	立 川 祐 輔	長沼町 町立長沼病院事務局・次長
	松 居 敦 子	ニセコ町 企画環境課経営企画係・主査
	貞 村 俊 介	京極町 総務課庶務係・係長
2 班	松 木 幸 枝	鷹栖町 税務課税務係・主幹兼係長
	小 林 大 介	東神楽町 産業振興課・課長補佐
	五 十 嵐 宥 人	中富良野町 企画課定住促進係・主事
	齋 藤 翔 太	中頓別町 政策経営課政策経営グループ・主査
3 班	小 里 純 平	置戸町 企画財政課企画係・係長
	塚 田 玲 央	池田町 企画財政課企画調整係・主任
	寺 本 恭 啓	豊頃町 産業課・課長補佐
	小 林 弘 昌	鶴居村 企画財政課・課長補佐

～外国派遣研修事業に参加して～

顧問 (一社) 地域研究工房代表理事
北海道文教大学地域創造研究センター長
小磯修二

自治体職員の政策力向上を目指す北海道市町村振興協会の活動をお手伝いしているご縁で、このたびの外国派遣研修事業に参加させていただきました。私は行政や研究の現場で長く地域政策に関わってきていますが、地方自治、分権の意識、伝統が深く根付いた欧州の政策経験は大変貴重だと思います。それだけにこの研修では、欧州の実際の空気に触れることで、参加者がより自治体職員としての誇りを感じ地域への理解と意欲醸成を高めていく契機になってほしいという強い期待がありました。

各地で対応してくれた自治体担当者の説明に聞き入る団員の真剣な姿に接し、また研修期間中に皆さんから伝わってくる驚きや、新たな発見の声に、今回の欧州での経験がいつの日か地域自立に向けた政策形成の土壌の糧となってくれることをあらためて確信するとともに、外国派遣研修事業の大切さを強く感じた次第です。

以下、2点について、私の感想を記します。

今回の研修のねらいの一つは、ドイツのシュタットベルケの実態調査でした。シュタットベルケについては、自治体がエネルギー供給や地域交通、インフラサービスなど幅広い部門を統合的に事業運営する仕組みとして近時日本で注目されていますが、一方で部門の幅や、規模の大きさなど多様で、さらに広域的な事業体などもあり、日本の自治体がどのように受けとめていけばいいのなかなか難しい面もあります。今回訪問したバート・クロツィンゲン市は、人口2万人弱の小都市です。事業採算性の悪い公共バス事業を市民主導の柔軟な仕組み、工夫により機動的に生かしている、これまでわが国では紹介されていない興味深い事例でした。退職された元気な市民が生き生きと主体的に地元の公共交通を担っている姿は感動的でもありました。住民の力を活かした柔軟な手法による今回のシュタットベルケの調査は、小さな自治体でも知恵と工夫で少なからぬ課題を解決していける可能性と自信を与えてくれました。

スペインのバスク地方は初めての訪問でしたが、独自の文化と独立運動が盛んで、強力な自治権を持つ地域で、どのような意思決定で都市政策が進められているのか大変興味がありました。訪問したのは、「ビルバオの奇跡」と呼ばれる産業空洞から近代創造都市への転身を図るビルバオ市、美食文化都市の代名詞となったサン・セバスティアン市でしたが、政策担当者の説明で印象的だったのは、

どちらも長期的な視野での総合プランに裏打ちされた政策遂行への自信でした。小手先ではなく、思い切った大胆な魅力ある都市づくりに挑戦し、多くの人、投資を呼び込み、その富で次世代につなぐ都市基盤を上げる、長期的な都市開発政策の理念と自信が伝わってきました。バスクでは、40年間バスク語の使用が禁じられていました。そのつらい経験から自治を守る事の大切さを痛感し、次世代につないでいく強い政策が生まれてきたのだと感じました。



【ハイデルベルグ市街を眼下に】

研 修 記 録

公式訪問① 担当：1班

ドイツ／バート クロツィンゲン市、フライブルグ市..... 7

公式訪問② 担当：2班

スペイン／ビルバオ市..... 14

公式訪問③ 担当：3班

スペイン／サン セバスティアン市..... 20

ドイツにおける交通政策・環境政策
～官民連携による地域公共サービスと環境共生型エコタウン～

- 【訪問先】 パート クロツィンゲン市(ドイツ)、フライブルグ市ヴォーバン地区(ドイツ)
【対応者】 Mr. クリスチャン・トーマン (財務担当)
Ms. ステファニー・フォン・デッテン (交通担当)
Ms. ユタ・ブリュックナー (市民バス協会会長・ドライバー)
Mr. アルフレッド・フォアベルク (市民バス協会ドライバー)
【通訳者】 松田 雅央氏

◎はじめに

日本は、本格的な少子高齢化・人口減少社会に突入している。人口の減少により、地方税収入は減少し財政環境が一層厳しくなることが予想され、住民の生活を支える道路・上下水道をはじめとするインフラや公共施設の維持・更新のあり方は全国的な課題となっている。

また、地方公共交通への影響も深刻である。過疎化・高齢化を背景に地域の交通事業者は長年にわたり不採算の状態が続く中、路線の縮小等で赤字の縮小を図るほか、国や地方公共団体からの補助金によって運行を継続している地域も多いのが現状である。運転手の高齢化も進み、路線の廃止を余儀なくされる地域も少なくなく、移動手段に制約を抱える住民が増加している現状に多くの自治体が頭を悩ませている。

多方、我が国は地球温暖化対策計画において、2030年度に温室効果ガス46%削減(2013年度比)を目指すことを表明しており、全国の地方公共団体や民間企業においても、ゼロカーボンシティ宣言や環境政策の積極的な取り組みを展開している。

このような課題や目標が明確にされている中、訪問先のパート クロツィンゲン市では、自治体が出資する民間経営事業体が、エネルギーや公共交通などの地域に必要な公共サービスを担う「シュタットベルケ」の仕組みについて学んだほか、フライブルグ市ヴォーバン地区では、住民参加による環境先進住宅地の現地視察を行い、持続可能な社会経済を環境保全の視点から実現しているドイツ・バーデン＝ヴュルテンベルグ州の多様な取り組みについて研修した。

◎訪問先の概要

「バーデン＝ヴュルテンベルグ州」は天然資源には恵まれていないものの、勤勉で進取の気性に富み、技術的財産を作り上げてきた人的資源の豊富さにより自動車やエンジニアリングなどの工業が中心で、その他じゃがいもやトウモロコシなどの農業も盛んに行われ、ワイン生産も行われている。

ドイツには、「シュタットベルケ」と呼ばれる自治体出資の公的企業が存在する。この「シュタットベルケ」は、赤字部門の経営を黒字部門の収益によって支えている仕組みに特徴があり、主にエネルギー事業で得た利益を他の公共サービス(地域公共交通やプール、公園、街灯など)に補填することで地域の公共施設等を運営・管理している。

パート クロツィンゲン市においても、水道事業、電気事業、ガス事業、公共交通事業が



【ヴォーバン地区を走行するトラム】

「シュタットベルケ」により運営されており、本研修では、「シュタットベルケ」の役割と組織形態のほか、地元 NPO がボランティアで運営している市民コミュニティバスの取り組みを学び、実際にボランティアドライバーによるバスの乗車体験により、ボランティアの方々の想いや取り組みを聞くことができた。

フライブルグ市は、ドイツ国内における「環境首都」に選ばれ、交通政策、環境都市政策、エネルギー利用対策、森林保全対策、環境教育などの各種施策を組合せ、世界に先駆けた環境関連政策を推進している地域である。環境にやさしい次世代の路面電車と自転車を優先し、自動車の乗り入れを規制した交通政策を実施していることでも有名である。そのフライブルグ市郊外にある約 38ha の新興住宅地・ヴォーバン地区は、住民参加による環境共生型のエコタウンとして、世界中から注目を浴びている。このヴォーバン地区の環境先進住宅地の現地視察を行うことで、持続可能なまちづくりを学んだ。

◎研修の内容

パート クロツィンゲン市の①「シュタットベルケ」の役割と組織形態、②「シュタットベルケ」の公共交通事業、③地元 NPO による市民コミュニティバス運営、フライブルグ市の④ヴォーバン地区の環境先進住宅地の現地視察を報告する。

1 シュタットベルケによる地域公共サービス

世界に先駆けて電力自由化と固定価格買取制度の導入を進めてきたドイツには、「シュタットベルケ」という自治体出資の公的企業が 1,400 社以上も存在し、電気・ガスなどのエネルギーのほか水道や公共交通など地域に必要な公共サービスを担っている。「シュタットベルケ」の仕組みは、単体事業としては不採算であっても事業体全体としては黒字が確保され、事業体としての持続可能性が確立されるといった特徴がある。日本における公営企業がイメージとしては近いものがあるが、この仕組みを法的に位置づけるものはなく、ほとん



【市職員からシュタットベルケの説明を受ける】

んどが私法上の民間企業である。法人格の責任者は自治体である一方、事業運営の多くは民間企業であり、独自の会計と独立した経済活動が可能となる。

「シュタットベルケ」の歴史は、19 世紀後半に始まり、時代の変化とともにその時代のニーズに合わせた公共サービスを提供してきた。1970 年代の水道供給から始まり、2002 年のソーラー設備の設置による再生可能エネルギー（電力事業）の発電力を確保することで制度の基礎が確立された。その後 2003 年に経済危機が訪れ、経営が厳しくなった民間公共交通事業を、水道・電力事業に統合したことで「シュタットベルケ」の組織形態が作られたとされる。

前述したが、「シュタットベルケ」は、主にエネルギー事業で得た収益を利用して他の赤字事業に補填することで、地域の必要なサービスの提供を行うことを特徴としている。パート クロツィンゲン市でも、公共交通事業の不採算分を他の事業で補填し黒字を確保しているほか、必要な公共サービスの管理運営を行うことにより、地域住民からの理解も得られている。また、単独の事業であれば労働部署が限られるが、複数の事業を 1 社で行っているため、分野をまたいだ働き方が可能となり、人員の余裕を確保、そして新たなサービス展開が

できるといったメリットもある。ドイツ国内においては、水道・電力等と温水プール事業を運営している「シュタットベルケ」が多く存在する。収益の上がる事業とそうでない事業を統合することで、税制上のメリットも生まれる。このように、「シュタットベルケ」は経済的なリスクや従業員の確保などを総合的に判断し、各自治体・地域の実情に見合った規模や運営形態を選択しているほか、地域住民により良いサービスを提供するといった公共サービスの根幹に立ち返り、他の近隣自治体とも密に連携を図っている。

「シュタットベルケ」の仕組みをそのまま日本へ導入することは、法制度や規制、政府の方針など両国間に大きな違いがあることや、民間事業者に委ねた経営成果の達成と公共性の担保の両方を実現することについても多くの議論が必要と考える。しかしながら、日本版「シュタットベルケ」の研究や議論も進んでおり、ドイツの「シュタットベルケ」のような地域公共サービスの仕組みが、人口減少時代を迎えた我が国における諸課題の解決の一助になることを望んでいる。

2 地域公共交通政策～RVF～

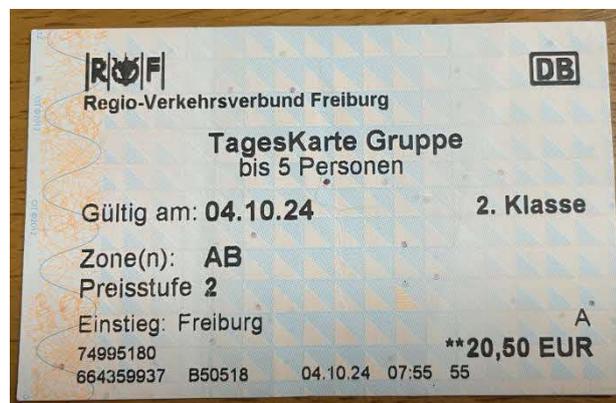
フライブルグ市では、地域全体の公共交通の利用を促進するため、フライブルグ地域交通連合（RVF）を設立し、公共交通の効率的な運営を行っている。パートクロツィンゲン市の「市民コミュニティバス」もRVFに加盟しており、多種多様な事業体との運行時間の調整、マーケティング、料金の設定等を包括的に行っている。

本研修では、Sバーンと呼ばれる高速鉄道を利用して、フライブルグ市からパートクロツィンゲン市まで移動したが、購入したチケットのみで、他市の市民バスや他の路線バスにも乗車可能であることが包括的に管理しているメリットである。RVFに加盟することで、同じ料金体系、且つ、チケット1枚で各運輸事業体間の利用が可能となる仕組みが形成される。

RVFの連合活動は公共交通の効率的な管理形態であるが、全ての権限を有しているわけではない。あくまでも地域で走行する事業体のことは地域で決める。例えば、どの路線にどのようなバスを走らせるべきか、どういった路線にするかは自治体で設定し、公共交通の提供と維持管理を行う。そのためには、地域の要望を吸い上げ、実現に向けて議論を交わすことが必要不可欠となる。

公共交通システムは、構築から運用まで長い時間をかけ、積み上げて完成するものであり、パートクロツィンゲン市では、市と市民バス協会及びその他の路線バス事業者が密な関係を築き、吸い上げた要望を共に実現していく事を、公共交通整備における考え方の基本方針としている。

パートクロツィンゲン市では、2030年に向けて地域公共交通の能力を倍増させる計画を作っている。これは高齢者等による人口動態の変化や市民からの要望も一端となっているが、それよりも、二酸化炭素の排出削減等による気候変動の保護が大きな比重を占めている。日本においても、昨今SDGsといった総合環境政策が取り沙汰されている中、小規模な自治体であってもサステナブルな地域公共交通の充足と同じくして、気候変動の保護、防止といった環境保全の側面からも公共交通の見直しを図らなければならない。



【RVFで発行しているチケット】

3 市民バス協会の取り組み

パート クロツィンゲン市においても、我々の住む日本と同様に以前は市営で路線バスを運行していたが、不採算であることから、市としてバスの運行継続が困難になってきていた。

しかし、2003年に地域住民からの強い要望により、バス事業継続のための試みとして「市民バス協会」を設立した。市民バス協会は、日本のNPOに類似した組織であり、地域交通の不採算である側面と地域住民のニーズに上手に折り合いをつけながら、今日までバス事業を運営している。



【市内を走行するコミュニティバス】

この事業に着手するに至った過程は、日本における地方自治体がデマンドバス等の導入に際し、地域特性を勘案した中で、不採算路線でありながらいかに住民ニーズを実現できるか知恵を絞り奮闘している状況と重なってみえた。

市民バス協会の事業は、使用するバスの購入、燃料費、修理等の維持管理は自治体が行い、ドライバーの確保、ドライバーの健康診断、事故等に備えた保険の加入などは協会の役割としている。

本来、地域交通事業の運賃体系は、一定のルールや法律等により設定されるが、市民バス協会では運賃を独自に決定でき、ある程度フレキシブルな対応が可能である。この点が協会において事業運営をするメリットとなるが、他の事例とは異なり、真に特筆すべき事項は、「当該バス事業に携わるドライバーは無報酬のボランティアである」という点である。ドライバーの多くは年金生活者であるが、皆元気な方々で本事業の趣旨に賛同し参加し、充実した社会生活を送っている。

また、ドライバー全員がバス免許を所持していないため、使用する車両は9人乗りには制限されている。事業開始当初はバス専用の車両ではなく、9人乗りの普通車両を使用していたのだが、最近は乗車スペースが広く、環境負荷低減にも配慮したLPGとガソリンのハイブリット車両を導入してきている。

現在想定される課題は、バス事業を運営するにあたり、車両への設備の設置義務等のルールが厳格化されているところにある。普通免許で運転しているバスであるため、これらの規制が厳しくなると車両としての重量制限の規定に抵触してくる可能性がでてくる。

市民バス事業は、行政が担えないニッチな部分をボランティアの力を借りて柔軟に対応できることが特徴であるため、規制が厳しくなるとボランティアとしての楽しみが無くなり、その持ち味を十分に発揮できなくなるという側面がある。そのため、行政担当部局と協議し、いかに法の縛りをかわしていくかというところがポイントである。

とはいえ、ドライバーはボランティアであるので、「みんなで何かを成し遂げる」、「公共のために良いことを成し遂げる」という満足感が参加者のモチベーションに繋がり、非常に重要な要素となっている。現在では、このような趣旨に賛同するドライバーが多く集まってくれているため、本事業はドライバーの募集には苦慮しておらず、今後も継続できる見通しである。

4 エコタウン・ヴォーバン地区

ヴォーバン地区は、フライブルグ市郊外にある約38haの新興住宅地で、約5,500人の住民と商業施設に約600人の働き手が集う地区であり、住民参加による環境共生型のエコタウンとして、世界中から注目を浴びている。

【住民の意見を反映させた住宅地】

ヴォーバン地区はもともと戦後駐留していたフランス軍の兵営地で、東西冷戦終了後、住宅地の開発が始まった。まちづくりを進めるにあたって住民からは「ソーシャル・エコロジー住宅地」というコンセプトが提案され、緑化、地域暖房、省エネ住宅の推進、車のない住宅地づくりなどが盛り込まれ、子どもから高齢者までが住みやすい、生活者のためのまちを目指した。住宅地ができた後も住民の活発な意見が取り入れられ、環境や住宅についての意見・アイデアを集約する NPO 団体が発足され、まちづくりが進められてきた。これが住民参加によるまちづくりの模範例となっている。



【緑があふれるヴォーバン住宅地】

【車に依存しない住宅地】

ヴォーバン地区では住宅街への車の進入が基本的になく、駐車場は住宅地の端につくるという手段で対応している。自家用車の所持者にとっての不便はあるが、その代わりに路面電車やバスなど公共交通機関が整備されていることで利便性が高く、住民が高頻度で利用することで採算がとれることから電車の運行間隔を短くすることで、車を使わなくても不便ではなくなっている。自転車の専用道路も整備されているため、自転車の利用者数も増加しているほか、カー・シェアリングを利用するケースも増えている。

【安全な道路】

住宅街への車の進入がないことで、周辺の道路が『遊びの道路』となり、日常的に子どもたちが遊ぶことが前提とされ、安全が最優先されている。これにより子どもをはじめ住人同士が交流を深めることができる社会福祉的な機能を持つ空間ができている。

【自然が豊かな緑の街】

ヴォーバン地区では自然保護が取り込まれ、古くからある大きな木を保護すべき樹木として残すことで、夏は涼しい木陰がつくられ、蒸散作用による空気の冷却、広葉樹の葉は空気清浄の役割も担ってくれている。平屋根には屋上緑化が施され、路面電車には、線路の軌道が緑化され、芝生が植えられていることで、線路沿いの騒音防止にもつながっている。

【「住む人にやさしい」エネルギー効率のよい集合住宅】

ヴォーバン地区の住宅は、東西南北それぞれの方角から差し込む日差しの特徴を最大限に利用することを考えて建築されている住宅（パッシブハウス）となっており、高い断熱性能を持った断熱三重ガラスが使われ、断熱材をしっかりと組込むことで保温・保冷性を高め、自然光から得た熱を無駄にしないようになっている。換気機能については、空気の入替えを促すためだけのものではなく、熱交換器を併用させた仕様を用いているため、快適な温度且つ新鮮な空気が循環している。エアコンや給湯など、熱をつく



【ヴォーバン地区について説明を受ける】

るために使うエネルギーは最低限に抑えられ、夏涼しく冬暖かく、エネルギーを大量に消費せずに快適な生活を実現することができている。

実際にヴォーバン地区に行ってみると、メイン通りにトラムが走り、車はほとんど通らず、道路、住宅、公園などのいたるところに緑があふれ、公園や広場では人々が集まっていた。穏やかで心地よさを感じる住民参加による持続可能なまちづくりの姿を見ることができた。

◎質疑応答

Q 日本の水道事業は赤字となっているが、「シュタットベルケ」ではどのような運営方法で利益を出しているのか。

A パート クロツィンゲン市では黒字になるように水道料金を設定している。この料金は周辺自治体と比べても割安な料金設定となっている。また、運営管理を一部事務組合で行っているため、経費を抑える要因となっている。

Q インフラの老朽化等に対して、財政面で将来的な計画はあるのか。

A 収益を上げることで、今後の設備投資に費用を充てることができるシステムを組んでいる。また、改修や設備の更新など大きな出費ではなく、細かい方針を組み設備を維持している。

Q 財政指標の中に借入金の項目があるが、これはインフラ投資に充てているのか。

A インフラの投資額である。財政的に大きな借入が必要な状況になることはほとんどない。

Q 「シュタットベルケ」の決定の仕方は自治体の首長や議会が決めていくのか。

A 事業計画は法律的な枠組みの中で自治体と議会が決める。

Q ドイツでの再生可能エネルギー事業の見通しはどのようになっているのか。

A 再生可能エネルギーで収益をあげることが難しい時代となっている。以前は再生可能エネルギーの電力は売電し、自分で使うエネルギーを買う方法が経済的に良かったが、現在は作ったエネルギーのうち余剰分を売電する方法が得になるように変化している。そのため、小さな自治体では設備投資が大きくなってしまふことから収益を生むことが難しい状況となっている。

Q 公共交通事業で赤字でありながらも、今後も維持していくための見通しはどのようになっているのか。

A 小さい自治体では今後再生可能エネルギーで収益をあげることが難しくなっていく。近隣に大規模なエネルギー供給公社等があれば、資本参加することにより収益配分による利益をあげることが可能である。

収益が下がっていく「シュタットベルケ」は、サービスの縮小や他の形態への移行を迫られる状況が出てくる。

Q 市民バス協会ではボランティア運転手による運行を行っているが、運転手の募集は声かけをおこなっているのか、あるいは自ら応募をしてくるのか。

A 当初は運転手集めに苦労したため、イベント等で大きくPRを行った。時代が変わり、現在も引き続きPR活動も行っているが、やりがいを求めている方が多くいるため、自らの応募により運転手が集まっている状況にある。

Q どのような形で利用者の要望を吸い上げ、それを実現しているのか。

A 多くは運転手と乗客の会話の中から要望を吸い上げている。例えば病院で手術をした人が乗車した際には「もう少しゆっくり走ってほしい」と要望をいただいたこともある。

◎おわりに

バートクロツィンゲン市の視察では、「シュタットベルケ」とそれに伴う公共交通についての説明であったが、担当職員の方々は、本来業務が抱えているにもかかわらず、とても優しく、且つ熱量をもって説明してくれているのが伝わってきた。

「シュタットベルケ」は、電気・ガス・水道事業で黒字を出し、不採算である公共交通の赤字を連結決算する仕組みであった。こうすることで、各事業の「節税」に繋がるという説明を受け、なるほど理に適っていると感じたところである。

次いで、公共交通の説明を受け、実際に市民バスの搭乗体験を行った。先述の説明内容と重複するが、驚いたのは「ドライバー」のあり方であった。視察先であるバートクロツィンゲン市は保養地であるという地域性やドイツの国民性もあると思うが、この事業に携わるドライバーは全員ボランティアで、彼らは誰かの役に立ちたいという「やりがい」をモチベーションに頑張っている。また、その思いは一過性のものではなく持続し、受け継がれ、現在では自ら応募してくる人が多いことに驚きを禁じ得ないところである。

もちろん、自治体や市民バス協会の広報活動があつてのことではあるが、それを差し引いても「想い」を繋ぎ事業を運営していることに深く感銘を受けた。

我々地方公務員も「全体の奉仕者」として「地域の利益のため」に勤務しており、このドライバーの方々の志や事業の趣旨にとっても共感するとともに、初心に立ち返り公共の福祉の増進のため「やりがい」を見出し頑張ることの大切さを改めて感じた。



【バートクロツィンゲン市職員・市民バス協会の方々と記念写真】

～文化・芸術と食の都市ビルバオで、観光・交通・環境施策を学ぶ～

【訪問先】ビルバオ市（スペイン）

【対応者】・ビルバオ観光局

Ms. エステイバリス・ルエンゴ・セラヤ氏（観光局長）

Mr. フアン・バリーニョ・ガンゴイティ氏（マーケティング部長）

・ビルバオ市役所

Mr. ヴィクトル・トリミーノ氏（サステイナビリティ推進部長）

Mr. イグナシオ・アルダイ氏（モビリティサービス部長）

Ms. ノラ・アベテ氏（モビリティ&サステイナビリティ担当審議官）

【通訳者】 寺本 裕美子氏

◎はじめに

四季折々の自然と独自の食文化を持ち、日本有数の観光地として知られている北海道。2019年には約240万人の外国人観光客が訪れたが、新型コロナウイルスの影響で2020年には激減し、外国人観光客の需要に左右されやすい状況が露わになった。

また、新鮮で美味しい食材の宝庫であり、道内の経済は農業や漁業に依存している地域が多いが、これらの産業は自然災害や価格変動の影響を受けやすく、不安定である。さらに、広大な面積を持つため、長距離移動が必須であり、交通インフラの整備・維持が重要となる。特にローカル線の維持は困難で、2018年には営業路線の約4割が赤字と報告されている。これに加えて、自然環境の保護、温暖化対策、カーボンニュートラルの問題にも取り組み、観光政策と合わせて進めていく必要がある。これらは今後の北海道の大きな課題といえる。

今回訪問したビルバオ市は、かつて工業都市であったが、産業の衰退に伴う経済・環境問題を乗り越え、文化や歴史、観光資源を活用して「文化芸術都市」へと再生を遂げた。その再生の背景には官民連携や、歴史あるバスク文化と観光の融合、環境対策やインフラ整備による成功が「ビルバオの奇跡」として知られており、その都市戦略や政策について学ぶことができた。

◎訪問先の概要

スペイン王国の北部に位置するビルバオ市は、人口約34万人のバスク自治州の中心都市でビスカヤ県の県庁所在地である。

かつては工業都市として発展した町だったが、1970年代後半から80年代にかけて重工業の壊滅的な産業危機や大洪水などの様々な要因から産業基盤が急速に衰退した。その後、「都市再生プロジェクト」によるインフラや文化芸術都市生活への投資を行うことで再生した、創造都市の成功事例として世界中から注目を集めている。



【ビルバオの街並み】

また、「アスレティック・ビルバオ」という選手をバスク人に限定しながらも、いまだ二部に降格したことがないサッカーの名門クラブがあるほか、毎年11月には世界的な国際映画祭の開催、またミシュランの星を獲得したレストランが随所にあるガストロノミーの進化も目覚ましく、様々な趣味趣向にあった魅力的な観光都市である。

◎研修の内容

1 観光ポジショニング戦略

スペインの中で代表的な観光都市であるマドリードやバルセロナを熟した大人と例えると、ビルバオ市は成長中の思春期であり、その思春期を過ごす上で参考となる前例では失敗例が少ないため、より質の高い観光都市として成長できると誇りを持って政策を進めている。

バスク地方は小さな地域であり、第1の観光目的地となっていないのが現状である。バスコ（バスク人）、バスク語、何千年も続く文化、アイデンティティを政府一丸となって大切に保護してきた。どのようなアイデンティティをアピールするのか、誇りを持っている文化や観光資源をどのように差別化しながら届けるのかを大事にしながら、「誇りを持っているこの土地を売るんだ！」という情熱と強い意志を持って戦略に取り組んでいる。

ビスカヤ県は大西洋に面していること、バスク地方の民族であるアイデンティティが非常に根付いている地域であること、そして、ビルバオ市の様々な豊かな資源が強みである。大西洋の風景は、スペインといえ一般的にイメージされる地中海とは全く違い、その違いをアピールすることも戦略となっている。スペインには何度か訪れたことがあり、バスク地方に関心はあるが、バスク地方に何があるのかまだ知らない方々に対して、訪れてみなければわからないこと、バスク地方にしかできないことをアピールしていくため、「スペイン南部は行ったことがあるから、次はスペイン北部に行ってみよう。」と思っている方々を見定めるのが有効な戦略となる。

マーケティングに関しては、自分自身が誰なのか、何をどのように提供できるのかを明らかにしなければどこにも進めないということを強く意識しており、どのような分野をどのような優先順位で戦略的に進めていくのかを大事にしている。しかし、すべてのプロダクトを大事にするのではなく、いくつかのプロダクトに絞り優先的に取り組んでいる。また、どのプロダクトを選択しても必ず付随する料理やショッピングなどは、バスク地方のアイデンティティを伝えるうえで重要な機会となる分野となっている。

海岸沿いにはまだ未開拓な部分はあるが、観光客に知ってほしい美しい場所がたくさんあり、漁業も盛んな地域である。チャコリ（ワイン）も新しいプロダクトとして政府が力を入れている。また、バスク地方は豊かな自然に囲まれた地域でもあるため、郊外にはたくさんの農家がある。田舎というのもバスク地方の伝統を伝えるうえで大切な地域となっており、「アグリツーリズム」と呼ばれる宿泊施設にも力を入れている。



【グッゲンハイム美術館】

経済的・人材的に一番投資しているのは、スイス、イタリア、オランダ、アイルランドなどであり、この国々に対する戦略を最優先にしている。アメリカからの観光客は多いが大きな国であるため、国全体ではなく、東海岸など地域を絞って戦略に取り組んでいる。未来を見据えた長期的なプランが必要となるが、アルゼンチンやメキシコは文化的にバスク地方のルーツがある方々が移民しているというところで様々な共通点があるため、ターゲットの1つとして期待している。国によってどのような見込みがあるのかを分析しており、例えば、フランスに対してはどのようなプロダクトを提供すればいいのか、どのように推せばいいのかといったことを国ごとに分析し、戦略に取り組んでいる。ヨーロッパは様々な言語を話す

国が地続きとなっており、どの国境に面しているかで話す言語が違うため、フランス語圏に対する戦略、ドイツ語圏に対する戦略などで言語によってそれぞれ異なる戦略を組んでいる。

バスク地方は観光を躊躇うほど雨の多い地域であるため、ウィンタースポーツが好きな方々には喜ばれる地域ではあるが、気候の面においては不利な地域であるため、これからどのように解決していくのが課題となっている。

2 環境戦略 2050

気候変動という大きな課題に向けて、政府一丸となってプロモーションを進めている。持続可能な生態系に基づいて市民の生活の質を向上させる優れた環境的パラメータを達成することを目的として、カーボンニュートラル、健康長寿の町、気候変動に適応した町の3つにフォーカスし、「環境戦略 2050」という名称で取り組んでおり、大気汚染や騒音といった公害も含めて対策をしている。また、ビルバオ市は首長誓約に署名し、エネルギーや地球温暖化などによる気候変動に対する政策にコミットする1つの都市となっている。

戦略を進めるため、現在どのような状態で、どのように目的を達成していけばいいのかを把握するための測定を行い、様々なデータを集めて規模の調査をしてきた。

電力に関しては、交通機関や街灯など、様々な公共施設がどのように電力を消費しているのかを利用分野別に分析している。

エネルギーに関しては、全体的にどのような割合で電気、ガスや天然ガスなどの燃料を消費しているのかを分析している。自治州法「4/2019」では4つの戦略を明確にしており、少なくとも2030年までに自治体の公的エネルギー消費量を35%に削減する、自治体の電力消費量、熱消費量の32%は再生可能エネルギーで賄うなどの目標が定められている。

カーボンニュートラルに関しては、2019年までに約50%削減できており、2050年には90%以上削減できる見込みがあり、気候変動に伴うリスクをなるべく最小化したいと考えられている。

洪水のリスクに関しては、市民に対する意識づくりができていること、自治体と市民の間に団結力があることなど繋がりが大切である。

熱波のリスクに関しては、温熱快適性の予測や地中熱の測定を行い、マップを作り、ヒートアイランド効果の影響を分析している。自然の力を活用して人々の恩恵をもたらしながら社会的な課題を解決する考え方「自然を活用した解決策」を参考にモデリングしており、洪水のリスク、熱波のリスクは2050年までに50%削減を目指している。

騒音に関しては、スペインでは法律により市民に対しどのような騒音があり、どのように変化していくのかといった情報を市ホームページで公表する義務があり、5年ごとにアップデートしている。ビルバオ市内には69台ほどの音波計が設置されており、交通による騒音だけではなく、祭りやコンサートなどによる騒音についても分析している。

大気質に関しては、ビルバオ市内に進入する車両の排気ガスに含まれる二酸化窒素やPM-10、PM-2.5などを測定し、大気質のデータが表示されるパネルの設置や、40台ほどの大気汚染計測センサーを設置し、モニタリングしている。

グリーンインフラストラクチャーの取り組みも進めているが、ビルバオ市は庭園などを増やす土地がないため、垂直庭園が造られている。また、アーバンガーデニングがこれまで4箇所造られており、市民と一緒に農作業ができるスペースが増えている。緑地空間の創出というのは、地球温暖化対策に必要なプランであるため、これからも力を入れていく。

このように様々な公害に対して、横断的に取り組むことが必要である。また、ビルバオ市では市民を巻き込んだ対策であることが大切であると考えられており、市民集会といった名目で様々な意識づくりをする機会や、ディーゼルボイラーをより持続可能な燃料に置き換える計画を推進するプランも現在進めている。市民が猛暑の際にシェルターの利用ができるスペースを増やしていくことや、気候センターと呼ばれるネットワークの設置も予定されている。また、学校のカリキュラムの中に環境に対する意識づくりをする行事もある。

3 持続可能な都市モビリティ計画と低排出ガスゾーン

ビルバオ市は、モビリティの分野でもパイオニア的な存在として評価を受けている。市民の健康を大切にしながらヒューマンスケールでモビリティ戦略を進めている。

持続可能な都市モビリティ計画に関しては、移動手段のヒエラルキーにおいて自動車利用率が一番高くなっているものを、パラダイムシフトという形で徒歩・自転車を優先した政策に取り組んでいる。

1つ目は、「スピード30」。2020年9月からビルバオ市内のすべての道路で制限速度が時速30kmに変更された。1番大切だったのは市民の意識づくりであったが、様々な宣伝や広告のほか、X世代へのアプローチも戦略として行った。メリットとしては、交通密度を緩和することだが、ほかにも交通事故が24%減少、負傷を伴う事故が45%減少、死亡事故が6%減少、歩行者の被害が39%減少、自転車利用者の被害が14%減少、二酸化窒素が6%減少、車両による騒音が0.1%減少といった結果が出ており、歩行者・自転車利用者に対する安全性の強化や排気ガスの削減などにも繋がっている。

2つ目は、「ジェンダー行動計画」。ジェンダーバイアスは、社会的なものであり変えることは難しいが、女性の社会的役割と男性の社会的役割との差異を考慮した対策が必要である。近距離の移動やバス利用の仕方などの男女の違いを区別し、実際にどのように利用しているのかを分析することが重要であり、本格的かつ安全で持続可能なモビリティを実現する必要がある。

3つ目は、「まちづくり」。バルセロナで実現されているスーパーブロックと呼ばれる歩きやすいまちづくりのデザイン方法を取り入れることや、15分都市と呼ばれる徒歩・自転車で、15分以内で移動可能な圏内で日常生活ができることなど、市民のニーズが満たせるようなまちづくりを目指している。



【人が最優先の持続可能な都市交通計画】

で移動可能な距離を超える場合には、一番環境負荷が少ない移動形態であるため、向上させていくことが重要である。

自転車は柔軟性が高く、また、移動範囲も徒歩より広がるため、最も成長している移動手段である。2023年には自転車を購入する方々に対して購入引換券70枚を発行し、すべてが使用され、また、ほかにもメンテナンス引換券1,155枚を発行し、1,111枚が使用された。ビルバオ市内には299箇所の駐輪場、700台の貸出用公共自転車が整備されている。2023年の利用回数は201万回、利用者数は22,880人となり、ヨーロッパの平均値を超える人数であった。2018年は自転車による移動距離が約36kmほどだったのに対し、今では倍近くの約

4つ目は、「歩行者のモビリティ」。歩行者・自転車利用者はエスカレーターやオートスロープの利用率が高く、2023年の利用者数は1,600万人だった。ビルバオ市内には平地から上の地区へ繋ぐエレベーターが69台、エスカレーターやオートスロープが7台あり、安全対策として緊急避難システムや監視カメラ、外部との通信に支障がでないような対策を行っている。また、ビルボバス（路線バス）は、徒歩・自転車の次の移動手段として位置付けられている。徒歩・自転車

63 kmとなっている。

また、人身事故などの被害を最小限に抑えるため、交通事故数が0になることを前提に取り組んでいる。移動手段として自転車を導入することは必須だったが、最も立場が弱い歩行者に対しては細心の注意を払う必要がある。歩行者を優先するためには、皆に平等であることが大切であり、そのためにはエレベーターによる地区間の移動改善、信号機の設備の最適化、地区間のコネクションの向上といった課題がある。

低排出ガスゾーンに関しては、6月15日に条例が制定され、罰金が課せられるようになったが、実際には車両を正確に監視できるカメラなどの設備が整備された9月15日から制度が始まっている。車両が登録された年ごとに区別し、環境にやさしい車両であるのかを判別する環境ステッカーを車両に貼付し、A（2001年以降登録車両）、B（2006年以降登録車両）、C（環境にやさしい車両）の3つに区分し、ビルバオ市内でどの地域、どのゾーンに出入りできるのかを可視化している。A、Bについては、都市の中心部へのアクセスが厳しくなっている。

◎質疑応答

Q 様々な国でオーバーツーリズムの観光公害が増えている中、ビルバオもその影響を少なからず受けていると思うが、どのような対応を考えているのか。

A ヨーロッパ全体にオーバーツーリズムの傾向がある国が増えているが、それはこれまでの観光政策のミスであり、その欠点が今現実に表れているのが現状だと思う。

ビルバオの観光は産業の中で言うと成長中の段階であり、どんな産業でも良い面や悪い面、間違いや成功例などがたくさんある。その良い面も悪い面も両方理解する姿勢が大事であることと、サステナビリティと言っても、例えば自然を大事にすることや社会的な課題というのが市民にとって持続可能であるか、健康的であるか、経済的にも可能であるかということを見据えた計画が必要となっていく。他の都市の間違いも参考の材料となる。

モビリティの観点からも様々な意見があり、先を見据えた計画、長期的なプランが非常に大事になる。ビルバオも観光客が出入りする時、例えばクルーザーで来るなど様々なアクセス方法があるが、町の中心へアクセスするのに大型バスが入らないような公共交通機関を作っていくのに力を入れているところである。

Q さまざまな環境に対する目標がある中で、市が独自で市民の方々に義務付けていることは。また、中心部の車のスピードを時速30kmに抑えるとのことであったが、それに対する市民の理解は。

A 町は自分たちが作っているという文化が元々この町にはあり、前向きな評価につながったのかもしれないが、普通人々は大きな変化を嫌う傾向にあるため、それを理解したうえで市民にアプローチし理解を得て、市民のための政策ということで団結し、力が増したことが成功した例だと考える。

Q 観光政策を進める組織として、ビルバオ市の観光局以外に民間の観光協会などの幅広い観光推進をする組織があるのか。どの様な役割をしているのか、その関係についてお聞きしたい。

A ビルバオ市とビスカヤ県が繋がっているビルバオビスカヤという団体がある。他にもバスクツアーという機関があり、都市部と郊外での観光を同時に促進している。ビルバオ観光局では、ブランディングに力を入れており、海外に対する情報発信を担っている。近隣の町や他県とともに盛り上がっていかうという意識がある。

◎おわりに

今回の視察には、年代・性別・部署の異なる多彩なメンバーが参加し、北海道の観光・交通・環境施策のさらなる向上、活性化の在り方について、様々な視点から学ぶことができたように感じた。

これからも今回築くことができた貴重な人脈と経験を活かし、ビルバオ市で深く学んだ『地域の伝統、文化を守り、何より地域を愛し、地域づくりの担い手は自らである』ということを確認し、誇りを持って仕事に臨む姿勢を持ち続けたいと思う。

私たち自治体職員を取り巻く環境は、ますます厳しくなり、このような研修に参加できる機会が困難になる自治体も出てくるかもしれない。しかしながら、現地でしか得ることのできない経験を通し、同じものを見て、同じ空気に触れ、同じ食事をした仲間が全道各地にいることは何よりも心強いことであると信じ、この事業が今後も末永く継続できるよう次世代の後輩たちの背中を押していきたいと思う。



【アスレティック・ビルバオのユニフォームを着て、ビルバオ市庁舎にて皆さんと】

スペインサン セバスティアン市の観光施策
～人口19万都市の発展の背景と戦略～

- 【訪問先】 サン セバスティアン市（スペイン）
 【対応者】 Ms. カルメン・バス・サラス氏（観光担当）
 Mr. イニャキ・バロ・ガリン氏（交通担当）
 【通訳者】 寺本 裕美子氏

◎はじめに

北海道は、広大で豊かな自然や新鮮な食という観光資源があり、これらの価値や魅力が評価され、国内随一の観光地として確固たる地位を確立している。

また、北海道内の各自治体においても、特有の自然や農水産物、特産品といった地域の特性を活かして様々な取り組みを展開し、地域経済の活性化やまちづくりを行っている。

令和2年から新型コロナウイルス感染症の世界的大流行によって北海道を訪れる観光客が激減したが、令和5年に5類感染症へ移行して以降、旅行需要の回復に加えて円安の影響も重なり、インバウンドを含めた観光入込客数は回復してきている。しかし、昨今のコロナ禍によって変容した観光ニーズに対応するため、観光の高付加価値化など持続可能な観光地域づくりの必要性が求められている。

北海道は、食や観光の価値・魅力ともに一層高みに押し上げることができる潜在力を有しており、観光大国スペインにおいて、マドリードやバルセロナなどの他都市と比べて観光資源が乏しい中であっても、食や食文化を資源とした観光振興によって世界の美食都市として注目を浴びるようになったサン セバスティアン市の施策や戦略について取り組みを学んだ。

◎訪問先の概要

サン セバスティアン市は、スペインバスク州ギプスコア県の県都であり、人口は約19万人である。大西洋に面するスペイン北東部に位置し、フランスとの国境からは約20キロメートルの距離で、美しい海岸に恵まれている。19世紀後半にスペイン王室が避暑地として離宮を建てたことをきっかけに国内の貴族階級やフランス王族に人気の海岸リゾート地として発展し、今やヨーロッパ有数のリゾート地として注目されている。



【ビスケー湾とサン セバスティアン市】

サン セバスティアン市の主要な経済活動は商業と観光業であり、海岸リゾート以外には、特にバスク料理と「美食」の街で知られている。4年制の料理専門大学バスク・クリナリー・センターや名門料理学校が開学され、サン セバスティアン市内にはミシュランガイドに掲載される星付きレストランが多く存在し、「美食」の文化が根付いている。また、旧市街のバルで提供されるピンチョスと呼ばれる串刺し料理や小皿料理などは大きな観光資源となっており、ビスケー湾で採れる魚介類や、畜産物など地元で調達できる原材料も観光の発展に寄与している。

EU加盟国の中から毎年1都市が選ばれる欧州文化首都にも2016年に選定され、サン・セバスティアン国際映画祭など優れた文化面や、プロサッカーチームのレアルソシエダが本拠地として活動するなどスポーツ面においても盛んな都市である。

◎研修の内容

1 観光都市となった背景と公共交通対策

スペイン女王イサベル2世が医師に海水療法を進められこの地を訪れ、以降サンセバスチャンは王室御用達となった。その後、摂政女王のマリア・クリスティーナもこの地を気に入って訪れるようになり、1912年には避暑のための別邸を造らせたことから上流階級の中でも流行の避暑地となり、沢山の貴族などがこの地で夏を過ごすようになった。

2010年までは国内の観光客が大半を占めていたが、スペイン北部バスク地方の分離独立武装組織「バスク祖国と自由 (ETA)」が2011年に解体され、そこから海外に向けて積極的に観光施策を推進している。

サン セバスティアンの住宅地は、比較的標高が低めの平地と丘の上などにある住宅地が半数程度の割合で存在しているため、それぞれの住宅地のニーズにあった公共交通の整理が長年の課題となっていた。また、観光都市となったことによる交通量の増加や環境汚染も解消していかなければならない課題となっている。



【市庁舎での研修風景】

2 戦略

観光都市を目指すための戦略としては、街のブランドをアピールするために、美食としてのバスク文化、「MICE」、「プレミアム」というキーワードを使いながら、カスタマイズ可能なワンランク上の観光地ということ売りとし、スポーツ観光も戦略に組み込んでいる。25年前から三ツ星レストランを構えているシェフが多数いることや、ピンチョス、シードル、チャコリ等様々な伝統的な美食文化がそろっていることから、それらを活用して美食の街としての地位を強化し、さらに国際映画祭やジャズのイベントフェスティバル、ビーチでのコンサートなど年間を通じて行われる様々な国際イベントも観光イベントの柱として位置付け、一生に一度の経験を提供するワンランク上の高級観光地としてのブランディング確立・高付加価値観光を目指している。加えて、マリンスポーツやサイクリング等のスポーツ体験や、サッカーや伝統スポーツの観戦等も戦略の大きな柱とした。



【バルで提供されるピンチョス】

公共交通対策としては、「市民に対して優しい街・健康的な街・安全な街」をテーマとして、全てが持続可能であることが必要とし、交通網の整理、駐車施設、公共交通機関を優先できるような市民へのアピール、そういった内容で都市計画を策定した。

計画の主な内容としては、交通量が多い通りの解消、そのための自動車等の進行方向の変更、新たな駐車スペースの確保、自家用車の利用率を下げていることを計画した。

※MICEとはMeeting(会議・研修・セミナー)、incentive tour(報奨・招待旅行)、ConventionまたはConference(大会・学会・国際会議)、Exhibitiou(展示会)の頭文字をとった造語で、ビジネストラベルの一つの形態。

3 効果

観光分野においてスペインの傾向としては、ドイツ・イギリス・フランスからの観光客が多く、2010年までは国内の観光客が大半を占めたが、今ではアメリカからも沢山の観光客が訪れるようになり(2023年データでは62%が外国人観光客)、文化都市としても発信を続け、2016年に欧州文化都市として認定された。また、国際的な都市となったことにより市民全体の評価として前向きな反応を示していることや、町に対する投資の増加、就業率の向上、公共サービスの充実につながった。



【徒歩・自転車移動がしやすい街並み】

公共交通においては、交通網の断層化を図るためにバスやタクシー専用道と昔鉄道だった場所を自家用車専用道に分けたことにより渋滞等が解消された。また、町中にレンタル自転車を配置することや、レンタル自転車の駐輪場に併せて個人の自転車も駐輪できるよう駐輪場の整備を行うことにより、交通量の削減や排気ガス等の温室効果ガスの削減にも繋げることができた。それによって市民の環境意識が向上し、環境や自然に優しく過ごしやすいまちづくりを行うことができた。

4 課題

観光客が増えたことにより、観光客と市民の不和、物価の上昇、バスクのアイデンティティが失われるのではという不安、交通量が増えたことによる市内へのアクセス面の課題がある。

5 今後の対応等について

今までは観光プロモーションに注力してきたが、これからは管理運営を改善していく必要がある。公共空間の整備や宿泊施設の課題、公共交通の改善のためモビリティ部門等の関連部署と協力し、バスクを代表する都市として、アイデンティティが失われることなく持続可能な政策を検討し、ヒューマンスケールで「市民を中心に市民のため」のビジョンを失わずに施策を推進していく必要がある。

市内のアクセスについては、車のアクセスを減らすためにEUからの補助により都市部の東から西へ横断する地下鉄の工事が計画され、2027年完成予定となっている。この地下鉄が完成すれば、車のアクセスを大きく減少させることができ、渋滞や大気汚染の解消に繋がっていくことができる。交通量を減らしていくことができれば、今後、市民の生活空間を大事にしたまちづくりや緑地空間等の新しい公共空間の創設を行っていきたい。

◎質疑応答

Q 文化を継続させるためには次世代への継承が必要となるが、バスクの文化を守るために学校や自治体としても何か守っていく取り組みをしているのか。

A 昔から行われている伝統行事は歴史的背景から非常に政府が力を入れており、文化部(日本でいう文部科学省)が特にリードして学校の中でも文化に関するアクティビティを実施している。幼稚園、小学校でも毎年必ず伝統の服装をしたり民族舞踊を踊ったりもしている。博物館等でも子供向け行事などを通じて文化の継承を行っている。

Q 19万人の人口規模に対して地下鉄の建設はかなり大きなプロジェクトとなると思われるが、どのような狙いがあったのか。

A 地下鉄の建設については国からの提案であったため、大半の資金はバスク政府が出す

こととなっていたが、工事計画が出たときは市民からも規模が大きすぎるのではないかと
 の意見も多く出た。モビリティ政策の内容や政府としてもとにかく自家用車のアクセ
 スを減らしていかなければならない。郊外の町からサンセバスチャンに継続的に来ても
 らう為にも地下鉄の建設事業は必須であった。そして郊外の観光を楽しみながらの利用
 もできる。

◎おわりに

今回、サン セバスティアン市が小規模な
 都市でありながら、チャコリやピンチョス
 といったバスク地方伝統の食文化を軸にマ
 ドリードやバルセロナ等のスペイン国内の
 他の観光地との差別化を図り、世界から注
 目を集める都市に成長してきた背景を学ぶ
 ことができた。

日本では観光立国推進基本法により、観
 光は力強い経済成長を推し進めるための極
 めて重要な成長分野とされ、世界の観光需
 要を取り込むことにより、地域活性化、雇
 用機会の増大などの効果を期待出来るとさ
 れている。

北海道でも観光業を重要な産業の一つと
 して位置づけ地域の活性化を目指しているが、近年の温暖化の影響によりパウダースノーの
 質の低下や農水産物の生産量減少が懸念されている。そのような状況は、自然や食を観光資
 源の中心とする北海道にとって他地域と差別化を図るうえで看過できないものとなっており、
 今後は他地域との違いを自ら見つけ周囲にアピールする必要性が観光を推し進めるうえでよ
 り一層重要なものとなってくるものと思われる。

サン セバスティアン市で取り組まれている自分のまちの歴史・文化に誇りを持ち、その
 魅力を分析することにより既存の資源を活用して他地域との差別化を図り観光地として発展
 してきた面及び観光客のみならず地元住民にも配慮した交通対策などに北海道の今後のある
 べき姿を感じることができた。



【サン セバスティアン市庁舎内にて】

研修参加者見聞録

木村俊輝(奈井江町)

立川祐輔(長沼町)

松居敦子(ニセコ町)

貞村俊介(京極町)

松木幸枝(鷹栖町)

小林大介(東神楽町)

五十嵐宥人(中富良野町)

齋藤翔太(中頓別町)

小里純平(置戸町)

塚田玲央(池田町)

寺本恭啓(豊頃町)

小林弘昌(鶴居村)

外国派遣研修に参加して

奈井江町 木村 俊輝

【はじめに】

「この研修に参加しないのは損をしている」この言葉を上司から聞いた私は本研修に参加することを決意いたしました。

新型コロナウイルス感染症の流行後、5年ぶりの開催ということで、また変わらずに研修に参加させていただけたことに感謝し、たくさんの経験を積むことができればと思い研修に参加させていただきました。

【事前準備と出発】

長期間の研修の経験がない為、何を準備して良いのかもわからず、班のメンバーと情報を共有しながら研修の日が近づくのを待つばかりでした。出発の前日に現地の気温を確認するとドイツとスペインの気温差に驚愕し、慌てて荷物を詰め直し、不安と緊張が入り混じった前夜を噛みしめていました。

班のメンバーと羽田空港で待ち合わせをしており、お会いできた時には前夜に抱いていた不安も期待へと変わりました。研修が始まる前から私は班のメンバーに助けられていたとこの報告書を記載している中で改めて実感しました。

ホテル到着後から団結式までの時間が空き、不安からか部屋にじっとしてられなく、近くの神社へ赴き、団員の安全を祈願いたしました。

【いざヨーロッパへ】

前日の団結式の余韻が残る中、羽田空港へと向かいました。羽田空港での出国手続きはただならぬ緊張感があり、ようやく日本を旅立つ実感が湧いてきました。

誰も心配していた15時間のフライト。添乗員さんのご配慮のおかげで全員通路側の座席を確保していただけました。更には、搭乗率も少なく、広々と座席を使うことができ、搭乗人数までも調整できてしまう畠山さんの力に感服いたしました。長時間の空の旅も難なく終え、次の日から始まる研修へ体力を温存することができました。

【思い出のドイツ】

前日の移動疲れなのか、無事到着したこと祝い開催された飲み会疲れなのか、朝早い出発に若干の疲労感を感じながら研修先へと向かいました。

霧雨スタートという天候が思わしくない中でしたが、北海道を出発する前夜に気温を確認して防寒対策を施した自分を自分で褒めることとし、ドイツで通訳を担当してくれた松田氏の話に耳を傾けていました。

日本とは異なる建物、車、聞こえる言葉。見る、触れる感じ取れる全てが新鮮かつ知識へと変わるような場所へ足を踏み入れたことに身を引き締め、その重みを感じながら歩を進めました。

また、研修の質の高さに戦々恐々としたのは私だけではないと思います。後に控えている他班の先陣を切り、1班が研修の口火切りました。後の視察先での指標となれたかなと自負しております。私は病院に配属を受けており、ここで学ばせていただいたシュタットベルケは日本の公営企業会計に近いシステムであった為、先進地の経営概念を学ぶことができたのは貴重な経験となりました。



【1班メンバーと朝の散歩】

【お楽しみのスペイン】

スペインといえばサッカーのイメージしかなく、あくまでも今回の本文は研修なので期待してはみませんでした。いただいた行程表を見るとサッカースタジアムの見学が入っておりました。そんな期待に胸を膨らませ最初に訪問したビルバオ市も次のサンセバスチャン市もやはり街の中がサッカー文化で溢れており、スペインのイメージはイメージどおりであったと実感

させられました。

外国研修に参加する方とは、一度事前研修での顔合わせが初であった為、研修当日にお会いするのが2回目でした。そのような中、1か国目のドイツを経て、研修の要領や流れも全員がつかみ始めたのがスペインであり、振り返ってみるとランチでの出来事や夜の食事等、ビルバオ市をきっかけに殻を破った、破らせた団員が多くいて、団員相互間の絆が高まった都市であったと思えます。

私自身もビルバオ市をホームタウンとしている「アスレティック・ビルバオ」のサッカーユニフォームを着て、公式訪問先へ行くとは夢にも思っていませんでした。そのようなおふざけも快く許してくれたのは、このビルバオ市でのお酒を交えたコミュニケーションがあったからではないかと思えます。結果として研修が実りあるものになったのも、ここがターニングポイントであったと実感しております。

サンセバスティアン市は、食事も景色も素晴らしく、危うくフランス行きのTGVに乗るのを断念するところでした。訪問先で頂いたトートバッグは愛用しております。



【ビルバオサポーター】

【心踊るフランス】

パリと聞くだけで心が躍ってしまうのがわかるくらい気分が高揚しておりました。そのような中迎えたパリは警報級の豪雨。高揚感を打消し、研修であることを再度自覚されるような大粒の雨に打たれながら、バスから見えるパリの街並みを見ていました。とは言ってもやはり花の都パリ。バスの水滴がついた車窓から見

えるわずかな景色でも先に訪れた2か国と比べても豪華絢爛な建物が多く立ち並んでおり、昔に教科書で見た記憶と答え合わせをしていました。

パリは研修最終国であり、その研修の締めくくりとして、世界でも屈指の作品展示数を誇るルーヴル美術館へと行かせていただきました。西洋美術史から学ぶ歴史背景など学生時代の教養の足りなさを恥じるとともに再度、勉学への向上心を奮い立たせるくらい、展示されている作品は素晴らしいものでした。

ヴェルサイユ宮殿へ視察に行っていた組が凱旋門の前で写真撮影をしていたのが羨ましかったのはここだけの話にしておきます…

【おわりに】

この報告書を読んでいると一見順風満帆なものであったように思えますが、個人個人で様々な小さいトラブルがありました。

私自身もキャリーケースの暗証番号が何かの弾みで設定していたものから別の番号へと変わってしまい、「001」から順番に試さざるを得ない状況になってしまいました。班のメンバーからは「4桁じゃなくて良かったね」と激励の言葉を頂戴し、挑み続けること15分。「551」で夢の扉は開かれ、事なきを得ました。

様々な経験を積ませていただいたこの研修を無事終えることができたのも北海道市町村振興協会の事務局、また添乗員のティ・シィ・アイジャパン(株)の畠山さんのおかげであります。この場を借りてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

また何より、若輩者で人見知りの私を受け入れていただいた1班のメンバーには本当に感謝しております。この班のメンバーであったからこそ私は研修に行くことができました。ありがとうございました。

このように10日間の研修であったからこそ得られる物も大きかったと思います。事後研修はありませんが、またすぐにお会いできることを期待しております。

外国派遣研修に参加して

長沼町 立川 祐 輔

【はじめに】

本見聞録を書くにあたり、改めて手帳を見返したところ、令和5年度末に町長から外国派遣研修の話をいただいております。同時に令和6年度の人事異動がないことを察し、落胆しましたのを思い出しました。しかし、見聞を深める良い機会であるとともに、非常に光栄な話をいただいたことを理解し「参加させてください」と返事したのを覚えています。

すべてはここから始まりました。

【準備期間】

私自身、海外旅行経験が乏しいうえに今回の研修地が欧州という非常に遠い場所であることなどから、正直、不安しかありませんでした。

そのような折、8月6日に事前研修がありました。参加者が一堂に会し、外国研修の心得や、具体的な研修内容についてレクチャーを受けました。班に分かれて協議する場面もあったため、まずは同じ班のメンバーと打ち解けることができました。また、宿泊を伴う研修会であったため酒を飲み交流できたので、他の班の仲間とも親しくなることができ、不安が半減したのを記憶しています。

しかし、不安材料はまだありました。それは研修に持参すべき用品の準備です。班のメンバーとラインで情報交換をし、youtubeなどで旅に必要なものを調べ、Amazon等で購入するという作業を延々と繰り返しました。スーツケース、耳栓、首枕などなど。

嫁と相談し下着は宿泊日数分準備することで、現地で洗濯はせず、使用した分は捨ててくるように計画しました。これにより帰りの頃はスーツケースに空きができ、お土産を詰めることが出来るという算段でした。それでも夫婦でスーツケースに詰めたり出したりを繰り返し、結局、準備が完了したのは前日の夜でした。旅慣れていないので本当に大変でした。

【ドイツ】

ドイツまでのフライトは想像よりも快適でした。3列席でしたが、私と研修仲間が横並びで両通路側に陣取る形で真ん中の席は幸いにも空席であったからです。ここを荷物置き等の共用

スペースとして利用するとともに、トイレも自由に行けました。約15時間のフライトを終え、ドイツの空港に着いたのは現地時間の夕方でした。バスに乗り一路フライブルグのホテルへ。途中、トイレ休憩で寄ったサービスエリアで、さっそく有料トイレの洗礼を受けました。到着したホテルは想像よりも立派でした。疲れていましたが、班の仲間とホテルのバーで本場のドイツビールを味わいました。疲れた体にしみるおいしいビールでした。気持ちが高揚しているのかか勘なのか、朝は早く目覚めました。今思うと研修中の全日程早起きでした。



【初ドイツビール】

ドイツ・バート・クロツィンゲンの視察は、シュタットベルケと市民バス等地域公共交通についてでした。我々1班の担当でもあり、全員で気合を入れて勉強し質問しました。質問順が後になるにつれて内容が被らないように配慮しなければならぬ縛りがある中、全員が無事に質問してくれて1班の仲間には本当に感謝しています。

この日の夕食はビールとソーセージというTHEドイツというメニューでとてもおいしかったです。しかし、この夜に限らずビール等のアルコール飲料ばかり飲むわけにはいかず普通に水も飲みたいのですが、予てから聞いていたとおり水は非常に高価なものでした。日本円で700円ほど。背に腹は代えられないので買っちゃうのですけれども。

翌日見学したハイデルベルグ城は日本の城とは全く造形を異にしたものでした。堅牢かつ繊細で美しく、異国の地という要素もあり、さながらRPGのゲームの世界に迷い込んだような不思議な感覚でした。この城は山の中腹に建設さ

れているため、ビュースポットなのですが、眼下に広がる建物群の屋根は赤で統一されており、城だけではなく、周辺全てが景観的にも美しくずっと見てられるほどでした。

【スペイン】

ドイツから夜中に到着したビルバオではちょっとしたアクシデントがありました。慣れない海外であったため研修仲間の数名がダウンし視察に参加できない事態に。幸いその日は日曜日であったため、公式訪問はなく見学だけの日でしたので大事には至りませんでした。かく言う私も体調がすぐれず当社比50%ほどでした。私の場合は冷たい飲み物に飢えていたため、朝食時に氷をたくさん入れてジュースを飲んだことが原因だと考えます。食中毒のような症状で吐き気と下痢がすごかったです。水はミネラルウォーターを買うように気を付けてはいたのですが、考えれば水も同様、気を付けるべきであったと猛省しました。

また、研修先であるサン セバスティアンは坂と海のある街であり、小樽市や函館市を彷彿させ、この研修で一番風光明媚な場所でした。夕暮れ時にみんなで撮影した写真は最高でした。



【サン セバスティアンの海と夕日を背に】

【フランス】

フランスは残念ながら雨でした。しかし、パリオリンピックで見た歴史的建造物の数々、シャンゼリゼ通りを走る車窓からではありますが最高です。とても気持ちが高揚しました。あいにくの雨で写真もきちんと撮れませんでした。何度もネットで見た凱旋門のラウンドアバウトを実際に走り感激しました。

エッフェル塔ではバスから下車して写真撮影させてくれましたがみんな衣服がべちゃべちゃ

に。でもそれすらが良い思い出です。

フランスではルーヴル美術館にも行きました。私はもともと美術館に行くのが好きだったので興奮しっぱなし。ルーヴル美術館の入口にあるガラスのピラミッドを見たときには鳥肌が立ちました。中に入ると学生の頃教科書で見たモナ・リザやミロのヴィーナスの本物が目の前に。あらゆる角度から鑑賞し、撮影もしました。ガイドの方の作品の説明もわかりやすく、最高の時間でした。

【帰路】

シャルル・ド・ゴール空港からの帰路はとても辛いものでした。行きのフライトとは違ってかわって満席だったので、真ん中の共有スペースもなし。機内食を食べる際も脇を締めコンパクトに食べねばならず、加えて後ろの席の酔っぱらいが騒いでうるさく最悪の14時間でした。また、行きのフライトでは気になりませんが、さすがに長時間座っていると床ずれのようにお尻が痛くなるので、次にこのような機会があればお尻対策しなければと強く感じました。

【終わりに】

辛いフライト、食中毒症状など色々ありましたが、それを差し引いてもなお、本外国研修は何物にも代えがたい経験であり、目で見る建物や景色、聴こえてくる異国の言葉、食する料理の数々、五感すべてを総動員して感じ取ったつもりです。二度と見ることがない景色だと意識し、すべての瞬間を目に焼き付けたつもりです。

しかし、今思うともっとこうしておくべきだったと後悔の念ばかり。もう一度やり直せるなら、もっと上手に研修できると思います。

最後に、本研修の主催者である北海道市町村振興協会の皆様、添乗して下さった畠山さん、貴重な経験をさせていただいたことに心から感謝申し上げます。

また、研修で知り合った道内各地の仲間たちは誰かが欠けてもこのような満足のいく経験は出来なかったと思います。この縁こそ最大の財産として今後の行政人生の糧にしたいと思います。

市町村職員外国派遣研修に参加して

ニセコ町 松居 敦子

【出国～ドイツ到着】

日本を出発してドイツへ向かう途中、飛行機の窓からは氷河のようなものが見え始め、ドイツ国内の上空に入った際にはドイツの街並みが見え、今まで見たことのない景色に感動し、ワクワクした気持ちで本研修が始まりました。

飛行機の窓から見えるドイツの風景は、広大な農地の中に住宅が固まって配置されているなど日本の風景との異なり、ドイツのまちづくりや都市計画の姿に驚きと感動を覚えました。

【ドイツ・パート クロツィンゲン市にて】

ドイツでののはじめの視察先パート クロツィンゲン市では、「シュタットベルケ」の役割と組織形態、公共交通事業、市民コミュニティバス運営についての取組を伺いました。実際に市民コミュニティバスにも乗車させてもらい、その時に運転してくれたドライバーさんは、年金受給者になって何かできることはないか探していたことがきっかけでドライバーを始められ、現在は人の助けになること、運転手同士のつながりに生きがいを感じているとのことでした。お話されている間、終始嬉しそうな表情であったのが大変印象的でした。

【ドイツ・フライブルグ市ヴォーバン地区にて】

フライブルグ市では環境先進住宅地ヴォーバン地区の現地視察を行いました。現在私自身が担当している本町の「ニセコミライ」街区の取組のモデルとなるヴォーバン地区を直接見ることができたのは貴重な経験となりました。

ヴォーバン地区の視察後に、本研修顧問の小磯先生より「このヴォーバン地区を17年前に視察し、17年後訪れて時間軸でこの取組を見ると、実はその環境だけではなくて、住宅のよさもあり多様な人たちが集まる団地に変化してきたことが魅力となっている。まちづくりの中で、環境にこだわった最先端の住宅をまちづくりの中うまく溶かし込んでいくための17年間だったと感じた」との話を伺った際には、本町の「ニセコミライ」街区の取組もこの先時間はかかるものの、ヴォーバン地区のような魅力的なまちとなれるような取組を進めていかなければならないと気持ちを引き締める機会となりました。

【ドイツ・ハイデルベルグ城へ】

ドイツ最後の日の朝は、1班のメンバーと朝食後にホテル近辺を散歩し、ドイツの住宅街を散策しました。冷たい空気の中でしたが、帰りにカフェでコーヒーを飲み、ほんのひと時ゆったりとした時間を過ごすことができました。

その後は、ハイデルベルグ城の視察に向い、昼食には餃子の皮を使用したラザニアのような料理をいただいた後、ハイデンベルグ城の中へ。過去の戦いや戦争により崩れているところも多くありましたが、長い歴史を経てきたハイデルベルグ城の壮かさや存在感に感動しました。

【スペイン・ビルバオ市にて】

ビルバオ空港には夜中に到着。空港からホテルまでのバスの中からは、街灯やお店の灯りなどに照らされたビルバオの街並み、グッゲンハイム美術館などが見えてきて、疲労の中でも新しい街を見られることの期待感でいっぱいでした。

今回スペインで訪れたビルバオ市、サンセバスティアン市は、ビスペイン北西部からフランス南西部にまたがるバスク地方と呼ばれる地域にあり、バスク地方では、ヨーロッパで最も古い言語と言われるバスク語が現在も公用語として使われ、独自の文化と伝統とともに受け継がれています。

本研修中もバスク語を公用語として守り、受け継いでいる話をたくさん伺い、バスク語に触れることができたのは良い経験となりました。

ビルバオ市では、芸術文化が観光振興に発展したプロセスや、公共交通、環境を含んだ観光政策についての取組を伺いました。

ビルバオ市は、グッゲンハイム美術館の開館を皮切りに、工場排水に汚染された河川環境の改善、交通網の空白地帯にトラム路線を設けるなど市内外の周遊者にアクセス手段を提供することで、古くからの街並みが残される旧市街に調和した文化・芸術を活かす創造的なまちづくりの取組を行ってきました。実際に旧市街に近代的な施設や建物があっても違和感は感じられず、古さと新しさをうまく調和し、文化・芸術を活かしたビルバオの街は魅力あるまちでした。

観光政策では、市民のためになるかどうか、長い目で長期的な政策を行っていくことが大切であるとの話を伺い、持続可能な都市として、最終目標は市民の健康とお話される場所に国

際都市の取組みの素晴らしさを感じました。

【スペイン・ゲルニカの街】

ビルバオ市の視察後は、ゲルニカの街へ。ゲルニカの街は、ピカソがスペイン内戦の悲劇を描いた絵画『ゲルニカ』で世界的にも知られています。スペイン内戦中の1937年4月26日、ドイツ空軍がスペイン北部の都市ゲルニカに対して爆撃を行いました。これが戦史上初の本格的な都市無差別爆撃となり、これをピカソが描きました。現在、絵画『ゲルニカ』は首都マドリードのソフィア王妃芸術センターに保管され、ゲルニカの街にあるものは原寸大の複製でした。この複製のゲルニカを見ながら、通訳の寺本さんの「バスク州は熱心に絵画の展示を希望したが、ゲルニカの街には戻っていない」という言葉は私の心に深く残りました。

【スペイン・サン セバスティアン市にて】

サン セバスティアン市においても主に観光政策についての取組みを伺いました。観光都市として持続していくために、市民の声を大切に、公共の場の整備やオーバーツーリズム対策のため郊外の観光と街中の観光との整理などに力を入れており、アイデンティティが失われることのない観光政策を進めていることに感銘を受けました。

サン セバスティアン市庁舎やイゲルド展望台から見たサンセバスチャン市街は、海と太陽によって輝く素敵な眺望でした。

スペインにおいても1班のメンバーと朝食後やホテルでの休憩時間に街中や住宅街を散歩することができました。ビルバオ市、サン セバスティアン市それぞれの街の景色、人、建物などをじっくり散策できて良い時間を過ごすことができました。

またスペインの食事は、昼食も夕食もステーキが続くときがあり胃がびっくりしたものの、トマトやアボガドなどの野菜は大変美味しく、スペインの食文化も存分に味わうことができました。



【イゲルド展望台で記念撮影】

【フランス・パリにて】

最後の視察先パリへはTGV（フランス国鉄の高速鉄道）にて移動。1班のメンバーとTGVのバー車両にも行き、フランスの田園風景の景色をゆっくり眺めながらの移動となりました。

パリ到着後は大雨でしたが、雨の中でもパリの街中は歴史的な建物、セーヌ川などワクワクさせるものが溢れていました。

パリでは観光施設の現地視察としてヴェルサイユ宮殿を視察し、世界各国からの観光客の多さに世界的観光都市の姿に圧倒されました。

【おわりに】

本研修では、それぞれの地域の持つ文化や言語、市民の存在を大切にしまちづくりに触れる機会が多くありました。スペインのビルバオ市もサン セバスティアン市ではアイデンティティと市民を第一に考えた上での持続可能な観光都市としての政策を行っていたことが強く印象に残り、ドイツの取組みにおいても市民の存在が強く感じられました。

持続可能なまちづくりには、目先の幸せだけではなく、長期的な政策、そしてアイデンティティや市民の存在を大切に考えていくことの重要性を学ぶことのできた大変良い機会となりました。

最後に、この研修では振興協会のみなさん、添乗員の畠山さん、現地の通訳さんのおかげで研修期間は充実した時間を過ごすことができました。また一緒に参加した他町村のみなさんとの絆はかけがえのないものとなりました。本研修に参加できたこと、心よりお礼申し上げます。

外国派遣研修に参加して

京極町 貞村 俊介

【はじめに】

この度、以前から参加を希望していた外国研修に参加させていただきました。10日間の研修では「交通政策」や「環境政策」、「観光政策」などについて現地の職員やガイドの方々の貴重なお話をいただいたほか、現地の歴史や文化を肌で直接感じることで、ヨーロッパにおける地域づくりに関する先進的な取組みを学びました。個人的には「見識を広めること」と「ヨーロッパにおける食文化を楽しむこと」の主に2つの目的を持って参加したところですが、特に後者については、食への関心が高い私にとって、現地での食事が楽しみでした。実際に、研修者全員お酒が好きということもあり、現地での食事はとても楽しく有意義な時間となりました。

見聞録の作成にあたり、研修中の学びについては、優秀な他の隊員が記していただけたと思うので、私からは、各国の食文化について書き記したいと思います。

【各国の食文化】

そもそも食文化とは、地域や時代などにおいて共有され、それが食材や調理法、食べ方など一定の生活様式として習慣化され定着したものとされています。そして、お酒は各地の風土に育まれながら様々な進化を遂げ、数千年の間、世界各地で人々に親しまれています。研修中は各国の食文化に触れ、その国・地域にしかない食材や味付けなどを体験しました。

〇ドイツ

研修1か国目はドイツ。ドイツといえば言わずもがな「ビール」です。ヴァイツェンやピルスナーをはじめ豊富な種類のビールが存在します。一般的にもビールとソーセージをイメージする方が多いのではないのでしょうか。ビールは大麦を発芽させた麦芽をビール酵母により発酵させて造るお酒ですが、ドイツにはビール純粋令という法律で、麦芽・ホップ、水、酵母のみと使用できる原料に制限があったほどで、法的な効力を失った現在でも、当時の法令を守った醸造所が多くあり、ビール文化の誇りが受け継がれ品質の高さにつながっています。

ドイツには一度旅行で訪れたことがあり、ビー

ル以外のお酒を飲む想像はしていませんでした。1杯目そして2杯目もビール楽しむ印象が強かったですが、移動中の車窓からはワイン用のブドウ畑も見られたほか、実際に昼食でドイツワインを味わう経験ができ、「ドイツと言えばビール」ではないと、帰町後に家族や職場の同僚に得意げに伝えたことは、今振り返ると気恥ずかしい思いです。また、以前訪れた時にはザワークラウトというキャベツを酢漬けにした料理やポテトがソーセージの隣に必ず添えられていましたが、必ずではなかった・・・ことなど、訪れた地域の違いもあるのですが、以前感じていた食文化と今回経験したそれらのギャップを感じたところです。

〇スペイン

2か国目はスペイン。グッゲンハイム美術館の建築により奇跡的な都市再生を果たしたビルバオと世界屈指の美食の街サンセバスティアンを訪問しました。私は、「美食世界一」のブランドイメージを築き世界有数の観光都市として注目を集めるサンセバスティアンでの食事にとっても興味を抱いていました。なぜなら、この地域はバスクと呼ばれ、海と山に囲まれた雄大な自然が豊富な食材を生み、個性的でおいしい郷土料理が発展した深い歴史があるからです。

旧市街にある路地を歩くとバルが数十軒も軒を連ねており、そこでは、ピンチョスというスライスしたバゲットの上に具をのせ、楊枝(ピンチョ)で刺してとめたおつまみを味わいました。バルではワインのほかサングリアを注文されているお客さんが多かったように思います。一般的には短時間でお目当ての店を巡り、いろいろなバルのピンチョスを味わうことがオススメのようですが、時間的な制約もあり1軒のみの食事となりましたが、念願の現地ピンチョスを食べることができ幸せな時間でした。この他、スペインでは、海の幸や山の幸などの現地料理を食したほか、スペインワインも何種類かいただきました。日本でもスペインワインは有名ですが、私自身ワインについて詳しくはなく、自らワインを飲む習慣もありません。しかしながら、いただいたワインはブドウが凝縮され口当たりが滑らかで全ておいしくいただきました。

スペインの食事は日本食と並ぶ健康食として知られています。日本食の特徴は主食と主菜、そして副菜2品と汁物の一汁三菜の食事スタイルで、1食で各栄養素が補える理想的な balan

スの良い食事です。一方、スペイン料理はほとんどにオリーブオイルが使用され、肉よりも魚介をたくさん食べます。また、新鮮なフルーツや野菜、ナッツ、豆類をふんだんに食事に取り入れ、チーズや生ハム、お米なども適度にいただくことでバランスの取れた栄養をとることができます。さらに、抗酸化作用のあるワインも健康である秘訣と言われています。そんなスペイン料理に感じたことは、「しょっぱい」ことです。私の主観かもしれませんが塩分を強く感じました。それはパンにつけても合い、ワインとの相性も増し、とても美味しくいただきましたが、「健康食であるのにしょっぱい！」と感じながら食事をしたことを記憶しています。

様々な気づき・発見を与えてくれたスペイン料理ですが、もともと、さしたる観光資源もなく、雨も多く気候にも恵まれないサン セバ스티アンが、「美食の街」として世界有数の観光地となったことに「食」の力を実感しました。「食」の力はひとつの街を変えることができる力を秘めていると改めて感じています。

○フランス

研修の最後の国はフランスです。フランスでは、セーヌ川クルーズにてコース料理をいただきました。「花の都」パリの有名な歴史的建造物がゆっくりと現れる豪華な眺めと幻想的な雰囲気を楽しむ何とも言い難い気持ちに浸っていました。

クルーズ船が出発すると同じタイミングだったでしょうか。食前酒のシャンパンの美味しさが忘れられないほか、魚や肉料理に合わせて白ワイン、赤ワインと順に提供され、それぞれの料理を美味しいワインで楽しんだ記憶が鮮明に蘇ってきます。一口一口、声を出すほど感動し、ここでしか食べられない幸せを感じながらの食事でした。

○各国の食を感じて

前述したとおり、食文化とは、地域や時代において、食材や調理法などが一定の生活様式として定着したものです。各国でいただいた料理は、どれも美味しく、私に多くの発見と感動を与えてくれました。各国・各地域で発展した産業により、それぞれの食文化が存在していることも理解しています。

私も小樽市出身の両親の元で育てっており、ぬたやにしん漬けなどの高塩分の海産物が我が家

の食卓には多く並んでいましたし、今でもそれらの料理はよく食べます。

世界各国のあらゆる地域でそれぞれの食文化がありますが共通して言えることは、食事はコミュニケーションツールで楽しい会話や笑顔が生まれることと考えています。さらに、お酒はその土地の食事をさらに美味しく力があります。もちろん、食べ過ぎ飲みすぎは体に良くないことを前提としてですが。さあ、今日も楽しく飲んで美味しく食べましょう。



【サン セバ스티アンでのディナー】

【おわりに】

団結式を含めた10日間の研修もあっという間に過ぎ、帰国して数日間には研修の余韻に浸っていました。現地を見て・話して・食べて・実際に肌で感じた歴史や文化は、自身の見識が広がっただけではなく、この経験をとおして以前とは異なる視点で自分のまちを感じる事ができたと思います。

本研修を最後までサポートしていただいた小磯先生をはじめ市町村振興協会の皆様、添乗員の畠山様、10日間を日夜ともに過ごした団員の方々、そして貴重な機会を与えてくださった町長をはじめ職場の方々に心から感謝を申し上げます。

外国派遣研修に参加して

鷹栖町 松木 幸枝

【はじめに】

コロナ禍を経て、2019年を最後に中止となっていた外国派遣研修がついに復活となると聞き、ようやく様々な事業が動き出してきたのだなど他人事のように聞いていたのが、確か2022年のことでした。

それもそのはず、まだその時は教育委員会に所属しており、当時の同僚に次の外国派遣に推薦されたと聞いた立場だったので、まさかその2年後に自分が派遣されるとは、夢にも思っていなかったのです。

晴天の霹靂のごとく、2023年の6月に税務課へ職場異動となり、目まぐるしく1年を過ごした2024年の6月に、以前決まっていた同僚がどうしても仕事の都合がつかないため、代わりに行かないかと副町長からお話を頂きました。

夫も2016年にこの研修に参加させていただいて、いつかは自分も参加してみたいとは思っていたものの、異動してまだ1年、小学生の娘もまだまだお母さん子で、いろいろな思いがよぎりましたが、課長や夫の後押しもあり、ほぼ即答で受けさせていただきました。

【事前準備】

良いことなのか悪いことなのか「Youtube」を見ますと大抵の事前予習ができました。

特に現在はロシア上空を飛行することができないため、フランクフルトへは14時間50分のフライトなので、いかに機内で快適に過ごすかが重要となり、機内持込手荷物の内容や機内の服装、過ごし方など細かく動画をチェックしていました。

また、ドイツ、スペイン、フランスのお店などの決済方法を確認し、両替手数料も考慮して今回はトラベレックスで10ユーロ分を5ユーロだけ紙幣、残りを硬貨2ユーロ2枚1ユーロ1枚に両替、あと10ユーロ分は知人がたまたま持っていた硬貨に交換してくれたので、合計20ユーロ分だけ現金で持参し、あとはデビットカード1枚とクレジットカード3枚持参しました。結果大正解！毎日のチップに1ユーロずつと有料トイレに50セント、あとタクシーに分乗した時の割り勘に5ユーロ紙幣を使用したくらいで、他の支払いはすべてカードが使用できました。

硬貨は帰国してから両替ができないため考えながらも少ない枚数でしたので、10セント硬貨まですべてきれいに使い切ることができました。日本と違い、どんな小さなバル（飲食店）でもカードが使用でき、私が一番最初にヨーロッパで使用したお金は、ドイツのアウトバーン（高速道路）SAトイレの1ユーロで、カードで支払いができました。ネット銀行のデビットカードには外国預金で事前にユーロを預金する必要があるため、毎日外貨取引のチャートを確認しながら、ぎりぎりまでユーロが安値になるのを待って購入しました。手数料もかからないため、ほとんどの支払いはデビットカードで行いました。次回行かれる方にはお勧めです。ただ、パリのモノプリだけがなぜかデビットカードを使用することができなかつたため、予備に持参したクレジットカードで支払いができたので、クレジットカードも数枚は必要でした。

【食を中心とした雑記】

今回の研修で最も楽しみにしていたのが、食事でした。元々大のフレンチ、イタリアン好きで、毎日でも良いと豪語しており、前世はヨーロッパ人なのではとさえ思っているくらい(笑)で本当に楽しみにしていました。団結式の食事からすでにイタリアンで、他の団員の方は日本食がいいな・・・と言っておられた方もいましたが、私は嬉しかったです。またANAの機内食も大変美味しく2回出る食事でも洋食を選択し、無事ドイツへ到着。すぐにバスでフランクフルトからフライブルグへ。この日の夕食はなんと添乗員さんご厚意でドイツの美味しい日本食屋さんのお弁当でした。思いかけず日本食が食べられたので、全員大喜びでした。

翌日の昼食はイタリアンでしたが、夜はてんこ盛のソーセージやザワークラウト、お肉などのドイツ料理で、ひとり一皿頼まなければならなかったらしく、相当な量の食事がテーブルに並び本当に大変でした。また致死量かと思うくらいの塩分のソーセージで、まだ行程前半なのに無理して食べた団員もいて、体調不良のきっかけにもなったのかもしれませんが。私も食べる方だと思っていたのですがとても全部食べ切ることではできませんでした。

翌日ハイデルベルク城での昼食は名物の大きなラビオリのような餃子のような肉料理で、肉を食べるのを禁じられていた修道女が皮で肉を包んで隠して食べたという逸話がある料理でし

た。ドイツらしい城下町のレストランで古い楽器が飾られた可愛いお店でしたがここもやはり大盛りで、美味しかったですが苦勞しました。この日のフランクフルト空港からビルバオの空路が過酷でホテル到着は 24 時近くになり、体調を崩された方も多かったです。私は班長と空港で夕食を取ったのですが、二人でシェアして何とか食べられる量でドイツは本当に量が多いのだなど実感しました。

ビルバオでは現地ガイドの寺本さんがバスク地方の伝統的なレストランを昼食と夕食に予約してくださっていて、まさかの肉料理が丸盛りで面白かったです。それにしてもやはり量が多い！！連日の暴飲暴食で胃腸が疲れてきている中での連続ステーキ！さらにデザート！！思い出しながら書いている日本での今はあの時残してしまった料理をとて食べたいのですが、その時の私は食べることではできませんでした(涙)

翌日のゲルニカでの昼食はビスクスープで魚介の濃い味付けのスープがメインでした。昼間にワインを片手に語らう高齢の方々が賑わいの大変み合ったレストランでのランチでした。その夜はサン セバスティアンのセレブが夏のバカンスで利用しているホテルに隣接したレストランで、ちょうどシーズンが終わり休業に入ったばかりのところをガイドの寺本さんの力で開けてもらったようで、支配人らしき方が私たちのためだけに貸し切り状態でサーブしてくださった、本当に素敵なレストランで、バスクの伝統的な料理だけでもフレンチに仕上げたような一品一品がとても上品なスタイルでした。それでも直前までの食事ですべてのお腹にはなかなか入っていきませんでした。

そのレストランでガイドの寺本さんとお話できた中で、たくさん料理が出てきて食べきれない罪悪感があるとお伝えしたところ、ヨーロッパは特にパンなどは、食べ残しはきちんと家畜に行くルートがあるので、全く問題ないとおっしゃっており、そこからは少し安心して残すことができました。また、次の日に向かうバル巡りでは、ピンチョスという小さめのバケットを小皿のように見立て、上に生ハムやオリーブ、青唐辛子の酢漬けといったおつまみを長いピグで止めた軽食とチャコリというバスク地方の伝統的な微発砲白ワインを少しずつ楽しむためにも、バケットは食べない！という攻略方法を伺いました。

翌日はビルバオ市内で研修後またたつぷりと

時間をかけたランチで、またもや骨付きの大きなお肉！お腹いっぱい食べ終わったのが午後 3 時。いったんホテルに戻り、再集合したのが午後 5 時。全くお腹がすかないまま、各自班ごとに自由なバル巡りへと放たれたのでした。

5 軒ははしごしようと自宅で予習していたバル巡りでしたが、班長と回れたのは 2 軒が精一杯で、それでも何とかチャコリと名物のウニやししとうのような野菜のピンチョスは食べることができました。

翌日はフランス行きの TGV という新幹線のような高速鉄道の車内で大きなバケットサンドイッチをシェアして食べました。これだけお腹がいっぱいと言っておきながらも、食べないという選択肢はなぜか無い私でした。

その日の夜は最も楽しみにしていたセーヌ川クルージング。夜景を見ながらのフレンチのコースをいただきました。残念ながら大雨で水位が上昇し、行程を全部回ることができなかったようですが、パリオリンピックでも見た景色が実際に目の前にあり本当に感動しました。フレンチ好きと豪語しながらも、今まで避けて通ってきたエスカルゴもすっと食し、お皿ごとに違うワインをサーブされ、夢のような時間でした。

【おわりに】

できるだけ、次に行かれる方の参考になるような記載にしようと考えていたのですが、個人的な食事日記になってしまいました。ただ今回の研修は「食」も大切なテーマとなっていましたので、あえて書き残すことにしました。

今回の研修に行かせていただくために携わったすべてのの方々に感謝申し上げ、筆を擱きます。



【セーヌ川クルーズディナーをみなさんと】

外国派遣研修に参加して

東神楽町 小林 大介

【はじめに】

最初、この外国派遣研修に声をかけていただいたとき、今まで国内外様々な地域へ研修や出張をさせていただいているため、私でいいのか？と参加について一瞬迷いました。しかしながら、その迷いも一瞬だけで「行きます」と即答したのが今回の研修のはじまりです。プライベートにおいて、海外旅行や各地へ旅行し、現地の日常生活や様々な体験、経験をすることが好きである私にとってこの海外派遣研修は、未だかつて行ったことのないヨーロッパの地で研修を受けられることは、必ず仕事のみならず人生の経験において見聞を広める絶好の機会になると感じていました。

【いざ、ヨーロッパへ】

8月の事前研修に参加し、研修の意義や心得、各班の役割分担などを確認し、夜の交流会では参加された皆と和気あいあいの中での交流を経て、当日を迎えました。

事前研修から久しぶりに参加者の皆さんと東京で合流し、団結式も絶好調に盛り上がりいよいよ出発当日の朝、ホテルのロビーに集合するも班員が一人見当たりません。体調でも悪くなったのか？班長を仰せつかった私は不安に思いつつも添乗員さんが部屋へ確認に行き、その後現れほっと一安心。前日の団結式の後も団結を深めすぎたようでした。そんなこんなで早速思い出もでき、羽田空港からヨーロッパへ向けていざ出発！行きの機内では空席もあり、飲んだり食べたりとリラックスしながら長時間のフライトを経て予定時間より早くフランクフルト空港へ到着しました。

【時差ボケとの戦いだったドイツ】

フランクフルト到着後、空港からさらにバスで3時間ほどかけ目的地のフライブルグへ。ホテル到着後は長時間の移動もあり、軽く一杯飲んで寝るつもりでしたが、疲れと興奮と時差ボケでなかなか寝付けず、悶々とした朝を迎えました。

バート クロツィンゲンでの研修は主にシュタットベルケという日本にはない組織と公共交通について学びました。シュタットベルケは、地方自治体が主体となって電気の供給や水道、

温水プール、公共交通など幅広い行政サービスを提供する事業経営体です。日本で水道や公共交通は利益の出る事業ではないと思いますが、シュタットベルケは様々な公共サービスを提供することで黒字部門が赤字部門を補いつつ利益を上げているとのこと。しかも、バート クロツィンゲンのシュタットベルケは部門ごとの専任職員も少なくどのように仕事をされているのか大変興味深いものでした。

公共交通では市民バス協会の会長さんから説明を受け、この協会には100名以上のボランティアが所属しており、バスの運転はボランティア、維持管理は市が管理しているとのこと。それぞれがしっかりと役割分担されています。会長さん曰く、「ボランティアとして活動しているので細かく、厳しいルールであれば楽しみがなくなる。それが市民バスの特徴ではないか」との言葉どおり、後にコミュニティバスに乗車しましたが、運転手さんも生きがいをもって活動されている姿に日本人との考え方の違いを感じました。この運転手さんはリタイア後ボランティアで運転されているとは思えないほど、細く曲がりくねった道を勢いよく走っていたのが印象的でした。お金だけではなく、生きがいややりがいを通して社会に貢献する姿を見て、心の豊かさを感じました。

この他にも、環境住宅地のヴォーバン地区をはじめ街中を見学し歩き感じたことは、随所に日本では見られない工夫があったり、市民が中心となる活動があったりとまちづくりの意識や環境に対する意識の高さを感じる研修となりました。

食事は外国あるあるの何せ量が多い。塩味強め。だからビールが進むのかな？と思いながらも何一つ完食することはできませんでした。

翌日はバスにてハイデルベルグへ。ハイデルベルグでは城を見学し、初めて見るヨーロッパの城やそこから見る景色はまるでテーマパークにいるような夢のような風景でした。

【美味しかったスペイン】

ハイデルベルグを見学したのち、今度は空路でスペインのビルバオへ向けて出発。これまた深夜の到着だったことや疲れもありようやく爆睡できるかと思いきや、深夜2時頃には目が覚めそこからなかなか寝付けず、また悶々とした朝を迎えます。ちょうどその頃、皆の疲れもピークに達していたのか、食べたものが悪かったの

か体調不良の人が続出しましたが、自分は何とか体調を維持し、ビルバオの街を見学することができました。印象だったのは、芸術的センスが全くない私でも見入ってしまったグッゲンハイム美術館です。美術館には多くの近現代美術の作品が展示され、作品のすばらしさがよくわからないながらも見ているだけで引き込まれるものがあり、あっという間の時間でした。家に飾った美術館で購入した絵画を見るたびに思い出に浸りニヤニヤしています。

ビルバオでの公式訪問は、ビルバオ市のビルバオツーリストオフィスでした。そこではビルバオの観光に対する取り組みを学びました。スペインと言えばバルセロナやマドリードの都市や地中海など思い浮かぶ方も多いと思いますが、北部に位置するビルバオは文化や言語も違うとのことで独自の文化をもち発展を遂げています。この研修で担当者の方は、「観光においてビルバオは成長中の思春期である」との説明が印象的で、自分たちの立ち位置をしっかりと把握し、何をどこにむけて発信するのか、国や地域ごとに分けた観光戦略を行っていることに感心しました。

公式訪問後はバスにてサン セバスティアン市へ移動し、ホテル到着後、少しの休憩をはさみ夕食会場へ。途中歩いたコンチャ湾の夕日と海岸沿いの街並みはしびれる程美しく、自分がここにいるのが申し訳ないくらいでした。

翌日のサン セバスティアン市への公式訪問では観光政策について学びました。サン セバスティアン市は人口約19万人であるものの、食や文化、スポーツなどで多くの観光客を誘客しており、都市圏では毎日43万人が入り出しているとのこと。また、まちの地形上、高地と低地があり、住民は半々くらいの割合でそこに住んでいるとのこと。そのため、まちには高地と低地をつなぐオートスロープを設置されており、現在では地下鉄も整備しているとのことでした。

観光が盛り上がり国際的な都市となったことで観光に対する投資ができるようになった一方で、住民と観光客の間での不和や物価の上昇がマイナス面だと話されていたことは、どの観光地においてもあり得ることなのだと感じたところです。

ビルバオ市でも、サン セバスティアン市でも観光客が多くなると人流も増えることから両市で学んだことは、公共交通や道路などのインフラ整備を進めつつ、併せて環境対策や人に優し

いまちづくりを住民とともに取り組んでいることです。住民も自分たちが住んでいるまちだからこそしっかりと意見を出し、まちづくりに参加しているということを実感しました。また、環境に対する取り組みでは、EUが補助金を出してくれることも日本では考えられないことと驚いたところです。

このほか、スペインではバル街で食べ飲み歩き、サッカーの名門レアル・ソシエダのホーム、レアル・アレーナのショップで買い物をしたりなどを体験できたことは印象深いものでした。

【ボンジュール フランス】

いよいよ今回最後の研修の地、フランス・パリへ。スペインからはバスで国境を超えるという初めての体験をしましたが、どこで国境を越えたのかまったく実感のないままフランス・アンダイエ駅から高速鉄道TGVに乗りました。TGVは席が回転しないらしく、4時間超を後ろ向きで進行するというこれまた日本では経験したことがない体験です。

パリでは公式訪問もなく、滞在時間も短かったです。雨で増水したセヌ川クルーズや初めて訪れるルーブル美術館などは、何もかもが非日常的で密かに興奮しました。

【おわりに】

今回の海外研修は、普段のノープランの海外旅行と違い身の引き締まる思いで参加させていただきました。3カ国を訪れ、公式訪問では現地の担当者のお話を直に聞くことができ、また熱い思いをもって楽しみながら取り組まれている姿に感銘を受けました。この研修では海外の現地視察も大変勉強になりましたが、短期間でも研修をとおして時間を共にした新しい仲間ができたことも大きな収穫だったと思います。

また、帰国後直ぐに新型コロナウイルスに罹患し、予定より1週間出勤が遅くなったのも今となっては思い出の一つです。

最後に、北海道市町村振興協会の皆様をはじめサポートいただいた皆様、団員の皆様と職場の皆様にご挨拶申し上げます。ありがとうございました。

外国派遣研修に参加して

中富良野町 五十嵐 宥人

【はじめに】

外国に対して苦手意識がありましたが、ふと「行ってみたい」という気持ちが強く湧き上がり立候補しました。ただ、1歳のやんちゃな息子がいる中で、10日間以上も家を空けるのはどうだろうと心配しながら妻に相談すると、「いいよ！こんなチャンスは滅多にないし、行けるならラッキーだね」と即答で背中を押してくれました。その言葉に背中を押され、参加できることになりました。とはいえ、出発日が近づくにつれて不安になり、胃痛がするほどでした。それでも、研修が始まると、新しい発見や学びに夢中になり、少しずつ不安が和らいでいきました。帰国する頃には、「もう一度行きたい」と思えるくらい自信がつかしました。

今回、参加するチャンスをくれた家族や職場の皆さんに本当に感謝しています。この経験は、自分の中で大きな一歩になりました。

【ニッポン（1日目）】

職場に挨拶を済ませ、期待と不安が入り混じる中、いよいよ旅がスタート。旭川空港で、2班全員が集合し羽田空港へ。空港に到着してからは、現地通貨のユーロに両替をしましたが、10,000円で約60ユーロ。すごく減った気がしました。出発式では、参加者全員と再会し、「始まるんだな」という実感が湧いてきました。

出国日の朝には思いがけないトラブルが発生しましたが、なんとか国際線に間に合ってホッとしました。これから始まる長時間の空の旅に「退屈するかもな」という気持ちと、「どんな旅になるんだろう」という期待が入り混じりながら飛行機に乗り込みました。

【ドイツ（2日目～4日目）】

午前に出発し約13時間のフライト。現地は夕方、だけど体感的にはすでに夜中。これが時差ボケの始まりかと実感しました。

フランクフルト空港周辺は、想像していたほど海外感がなく、なんだか外国人の多い日本みたいな雰囲気。ただ、所々で「ここは外国だな」と感じる瞬間がありました。たとえば、自動販売機に並ぶ500mlのコーラが3ユーロちょっと。日本円にすると約500円。それから、フライブ

ルグへ向かうバスから見える景色は電柱がなく、建物の壁にはアートのような落書きがいっぱい。そして、ほとんどの車がデイルイトを点けて走っていて、しかもベンツが普通にゴロゴロしているのが印象的でした。途中で寄ったサービスエリアでは、トイレがまさかの有料。硬貨を持っていなかったので両替しようとしたら、閉店間際だったせいか商品の購入すら断られる始末。こんなところにも、日本との違いを感じました。

3日目の公式訪問では、バートクロツィンゲンでシュタットベルケや地域交通について学びました。研修後、実際に市民バスに試乗させてもらいました。これがなんと、ドライバー全員がボランティアだと聞いてビックリ！しかも、多くのドライバーさんが年金暮らしの高齢者で、「国のために役立ちたい」「これまでお世話になった恩返しをしたい」という気持ちで運転を引き受けていると知り、本当に感動しました。

4日目、ハイデルベルグは観光地でもありながら、なんと大学の敷地だそうで、大学がこんなテーマパークみたいな場所にあるなんて、ちょっと羨ましくなりました。どこを切り取っても絵になる風景ばかりで、写真を撮るたびに写真上手くなったと錯覚しそうで。観光客に人気のスポットもたくさんあって、触ると幸福になれる猿の像や、子宝に恵まれるという門など、パワースポットも満載。ここで食べたクレープは、日本でよく見る三角形じゃなくて、まさかの四角形。そして中身はチョコたっぷりの激甘仕様！甘党にはたまらない一品でした。



【ハイデルベルグ城で記念撮影】

【スペイン（5日目～7日目）】

ドイツからビルバオに移動した夜、慣れない外国での活動に疲れ切って、ホテルに着くころには体調が「最悪」。疲れと車酔いで調子が悪いだけだろうと、「寝れば治る！」と思ってベッドに飛び込んだものの、数時間後には急な腹痛、吐き気、そして倦怠感に襲われました。ベッド

とトイレを往復していたら、そのまま5日目の朝に。悔しくも事務局に体調不良を伝えると、なんと他にも同じ症状の人が数人。原因は不明だけど、何かに当たったんだろなああと…。ただ、悔しいだけじゃなく、嬉しいこともありました。参加メンバーの皆さんから菓を分けてもらったり、お見舞いに食べ物をお願いしたりと、とても助けられました。知らない土地で体調を崩すのは本当に辛いけど、その優しさが心に染みしました。この場を借りて、本当にありがとうございました。

6日目の朝には、なんとか「不調」くらいまで回復し、公式訪問には参加することができました。ビルバオ市役所は元々ホテルだったそうで、街中の建物に紛れてありました。ビルバオで印象的だったのは、市のマーケティング力の高さと、バスク文化への思い。自分たちの魅力や課題、ターゲット層をしっかりと絞り込んでいて本当に感心しました。また、国をあげてバスク文化を守っているらしく、学校はスペイン語ではなくバスク語で授業をしているのだとか。

そのまま美食の街サン セバスティアンへ。ミシュラン星付きレストランがたくさんあると聞いて、期待が膨らみます。海もあって景色は抜群に綺麗。不思議と見ているだけで気分がどんどん良くなりました。その日のコース料理は、さすが美食の街と言われるだけあって絶品。店員さんもとても上品で、しかもサービス精神たっぷり。おかげで最高の1日になりました。ただ、料理と料理の間隔が長くて、待っているうちに満腹中枢が刺激されちゃったのか、次のお皿が来るころにはお腹がいっぱいで食べるのがやっと。それでも「食を楽しむ文化」というものに触れた気がしました。

7日目には体調も回復し、公式訪問で訪れたサン セバスティアンの市庁舎は元カジノを改装しているらしく、議場はまさにそれでした。サン セバスティアンが「ワンランク上の観光地」を売りにしていると聞きましたが、実際に街を歩いてみるとその言葉の意味がよく分かりました。立地、街並み、食文化、そしてイベントの多さ。「ここならではの」魅力が溢れていました。

ここで、日本では考えられないような文化を知りました。それは、バルで出たゴミを机の下に捨てるという習慣です。一見、不衛生に思えるこの行為ですが、実は「ゴミが落ちているほど多くの人が訪れている」という人気店の証とされているそうです。その文化に従い、私もゴ

ミを机の下に捨ててみましたが、やはり罪悪感でいっぱいになりました。

【フランス（8日目～9日目）】

8日目、公式訪問もすべて終了し、高速鉄道でいよいよパリへ向かいました。車内は2階建てで、なんと食堂車までありました。

パリに着いて最初に目に飛び込んできたのは、マシンガンみたいな銃を抱えた警官らしき人たち。事前研修で「治安が良くない」とは聞いていたけど、実際に目にするるとかなり衝撃的で、自然と鞆を体の前に抱え込むように歩いてしまいました。観光名所が多いパリでは、凱旋門やエッフェル塔、オリンピックの跡地を見られるのを楽しみにしていたけれど、あいにくの雨でバスツアーに変更。それでも、北海道とは違う風景に目を奪われました。

自由時間には、せっかくのパリだから雨なんて気にせず、数名でシャンゼリゼ通りに行きました。ルイ・ヴィトン本店やカルティエといった有名ブランドの店がずらりと並び、普段なら絶対に入らないような高級路面店にも入って、店内を物色。ちょっとだけセレブ気分を味わいました。

夜はセーヌ川クルーズに参加。これがもう大満足。料理もショーも素晴らしく、最高のひとときでした。一部のルートは連日の大雨で通れなかったらしいけど、そんなことも全然気にならないくらい楽しかったです。ちなみに、次回使える割引券をもらったけど、果たしてその「次回」は訪れるのか？

最終日はヴェルサイユ宮殿に行きました。宮殿はゴージャスで、圧倒されっぱなし。唯一知っていたマリー・アントワネットの寝室も見学しましたが…豪華すぎて逆に寝にくそう。ガイドさんの説明がとにかく詳しくて、まるで歴史の授業を受けているような気分になりました。

【おわりに】

外国での食事は、とにかく味が濃くてとても日本の食事が恋しくなりました。外国の良さも知りましたが、同時に日本の良さも感じられる研修になりました。不安だった外国も、行ってみればあっという間に過ぎ、見た目や文化、言語の違いはあるものの優しい人が多く、また訪れたいと思いながら帰国しました。貴重な経験と知識を得ることができ、この研修に参加して本当に良かったと感じています。

外国派遣研修に参加して

中頓別町 齋藤 翔太

【はじめに】

上司から呼び出され、嫌な予感がしていると、「外国派遣研修に参加してみないか？」という話で的中でした。「飛行機は苦手だから長時間のフライトは無理だ。復命書も面倒くさい。」と思いましたが、中頓別町からは一度も参加したことがない中、声をかけていただいていることを光栄に思い、その場で「行きます！」と即答してしまいました。その日、帰宅してすぐに妻に報告すると、意外にも快く承諾してくれました。

【出国まで】

事前研修会が行われ、外国派遣研修を共にする仲間が初顔合わせということで、人見知りの私は朝食、昼食が喉を通らないほど緊張していましたが、親しみやすい仲間が集まっていて、すぐに打ち解けることができました。

出国前日は東京のホテルへ各自で集合でした。自宅を出発する時に娘2人が「行かないで！」と泣きながらしがみついてくるので困りましたが、お土産をたくさん買って帰ることを条件に解放されました。ホテル到着後はホテル内での団結式やホテル周辺での2次会で、さらに交流を深めることができました。

そして翌日、いよいよドイツへ向かう朝、私は寝坊という大失態をやらかしてしまいます。羽田空港への出発時間は7時、私が起きた（事務局からの着信に気付いた）のは6時55分、「終わった…」と思いました。5分でスーツケースに荷物を詰め込んで、寝ぐせのままバスへ乗り込み、大謝罪をしました。みんな笑って許してくれて、感謝の気持ちでいっぱいです。

【ドイツ】

14時間ほどのフライトのほとんどを寝て過ごす、あっという間にドイツのフランクフルト空港へ到着しました。空港を出発し、フライブルグ市のホテルへ到着したのは深夜でした。みんなはホテルのバーで早速ドイツビールを嗜む中、私は寝坊を深く反省していたので、部屋へ入室してすぐにシャワーをし、そのまま就寝しました。機内をほとんど寝て過ごしたので、1時間ほどで目が覚め、それから眠ることができず、何を言っているのかわからないテレビや

youtubeを見ていると朝を迎えました。出発時間通りに来た私に対して、みんなは「今日はちゃんと起きれたんだね。」と言うので、「これが本来の姿です！」とドヤ顔で返したのを覚えています。

ハイデルベルグ市では、ハイデルベルグ城を視察しました。戦争による破壊と落雷による焼失の跡が残っており、その廃墟感から当時の悲惨さを痛感しました。城から下る途中に見えた家の屋根の上でギターを弾くお兄さんの姿は忘れられません。

外国での楽しみの一つである食事ですが、ドイツ料理は肉料理が多く、しょっぱすぎるかすっぱすぎるかのどちらかに全振りしていてほとんど食べることはできませんでした。ビールは美味しいですが、驚くほどの美味しさではありませんでした。ただ、ワインはとても美味しかったです。ドイツにワインのイメージはありませんでしたが、バーデン・ヴュルテンベルク州ではワインの生産も盛んに行われているそうです。ドイツではワインを主食に過ごしましたが、これはこれで最高でした。

【スペイン】

ビルバオ市では、ビルバオ港までのボートツアーを体験しました。NHKの教育番組「ピタゴラスイッチ」の「そこで橋は考えた」で紹介されている世界遺産「ビスカヤ橋」の下を通りました。実際にゴンドラが動いているところを見ることができず残念でしたが、娘たちとよく見ていたので感激しました。また、グッゲンハイム美術館を視察しました。館内を各自で見回り、集合時間までにロビーに戻るというものでしたが、芸術の良さが理解できないので、少し見てから外へ出てぶらぶらしていると、近くに「アスレティック・ビルバオ」のオフィシャルショップを発見しました。ユニフォームを購入し、すぐに着用して館内のロビーへ戻り、みんなに披露しました。みんな笑ってくれましたが、一時の笑いのための出費としては少し痛かったです。

「公式訪問でユニフォームを着て行ったら絶対に喜ぶよ。」と言われ、半信半疑で着用して訪問すると、本当に大喜びしてくれて、場の雰囲気も良くなったように感じたので、これはおすすめです。

ゲルニカでは、ピカソの「ゲルニカ」という壁画を見ました。この作品は一般市民が無差別爆撃を受けた様子を描いたものだそうです。よ

くわかりませんでした。有名な画家の作品を見ることができて感動しました。また、ゲルニカのレストランで私の胃袋が覚醒しました。メニューはサラダ、魚介のスープ、肉料理でした。これまで料理をほとんど食べるができなかった私ですが、味付けがちょうど良く、まさかの完食でした。この時、外国に来て初めて料理が美味しいと思いました。

サンセバスチャン市では、ラ・コンチャ海岸周辺の高級そうなレストランで夕食でした。薄暗くなっているにも関わらず、海で泳ぐ人々に圧巻されつつレストランへ入りました。オシャレで美味しい魚料理の数々で、ゲルニカ市での昼食に続き完食でした。この時、私にはスペイン料理が合うことが判明しました。

翌日は日本人スターの一人「久保建英」が所属するレアル・ソシエダのホームスタジアム「エスタディオ・アノエタ」を視察しました。スタジアム内には入ることができませんでしたが、オフィシャルショップで背番号14TAKEをプリントしたユニフォームを購入しました。ビルバオ市に続きユニフォームを購入しましたが、私はサッカーに特に興味はありません…。

旧市街での夕食は各自でバル巡りでした。一人で行ったオイスターバルがバルデビューでした。ワインと共に恐る恐る生牡蠣を食べ、2件目を探してぶらぶらしていると1班を発見したので合流し、賑わっているバルでサングリアと共にピンチョスを食べました。ピンチョスは一口サイズと聞いていましたが、やはり外国サイズで全く一口サイズではありませんでした。その後、生牡蠣にあたることもなく一安心でした。

【フランス】

待ちに待ったフランスのパリ市では、ホテルへ到着後、夕食までは自由時間でしたが、運悪く大雨でした。しかし、私には妻から唯一頼まれていた香水を買うというミッションがあったので、雨にも負けずシャンゼリゼ通りへ向かいました。高級ブランド店が立ち並んでいることと寒さに震えながらリサーチしていた「GUERLAIN本店」へ足を踏み入れました。自宅を出る前に妻に嗅がせられた匂いの記憶を頼りに探しましたが、匂いを覚えているはずもなく、一番人気の香水を購入することに決めました。レジ行くと325ユーロ（当時のレートで54,843円）でした。冷汗が止まらなくなりましたが、後には引けず購入しました。

セーヌ川のディナークルーズでは、セレブが食べるようなオシャレで美味しいフランス料理やシャンパンを味わいました。そして、もう一つのミッションです。それは、前回の報告書「イケメン見聞録」に影響されたものですが、美女と一緒に写真を撮ることです。ドイツ、スペインでは勇気がなくて行動できませんでしたが、ついには行動に移しました。ディナーショーで歌いながら席を回っている美女が私の後ろに来るたび、スマホのインカメラで撮影を繰り返しました。それに気付いた美女が自ら写真に写ってくれました。帰りにもツーショットを撮ってくれて、最高のディナーとなりました。

翌日はルーヴル美術館とヴェルサイユ宮殿を2班に分かれて視察しました。私はヴェルサイユ宮殿を希望していましたが、LINEあみだくじの結果、ルーヴル美術館組となりました。入館直後に警戒ブザーが鳴り響き、閉鎖されるアクシデントに遭遇しましたが、結果的には「モナ・リザ」や「ミロのヴィーナス」といった有名な作品を見ることができ、感銘を受けました。

【おわりに】

ヨーロッパの町並みは美しく、仲間にも恵まれ、とても充実した日々を過ごすことができ、行く前は長いと思っていた10日間もあっという間に終わってしまい、寂しい気持ちになるほどでした。しかし、自宅に到着すると家族が外に出て帰りを待っていて、10日振りに会った家族に癒されました。妻に購入した香水は欲しかった匂いではなかったようですが、喜んで使ってくれています。ただ、香水の金額は言ってないです。言えないです。



【セーヌ川のディナークルーズにて】

外国派遣研修に参加して

置戸町 小里 純平

【はじめに】

これまで、外国派遣研修への参加を経験された先輩方から、外国派遣研修について前向きな感想を聞いていたので、「いつかは自分も参加してみたい」という思いを持っており、私が担当する業務と今回の研修テーマが合致することも後押しとなり、応募することを決意しました。

10日間も連続して日常業務から離れることは不安で、不在の間の業務を心配していましたが、この思いは杞憂に終わり、帰国後、改めて部下の頼もしさを感じる機会となりました。

【事前研修と準備】

「外国派遣研修で10日間一緒に時間を過ごすことになる仲間はどうな人たちだろうか。」という期待と不安を胸に参加した事前研修では、海外への渡航経験が豊富な方々が多いことに驚き、海外へ行くのは大学時代の卒業旅行以来20年ぶり、英語も辛うじて中学生1年生レベルという私にとっては、楽しみよりも不安が一気に募りました。

その一方で、外国派遣研修への参加が決まった以降、漠然にしか研修内容を捉えられていませんでしたが、事前研修において講話や説明を受けたことで、約2か月後の外国派遣研修に現実味が帯び、自身の知見を広げたいという意欲が強くなりました。

事前研修で説明があった内容を何度も確認しながら、荷物を準備していき、「帰りにお土産等を入れるスペースを考え、スーツケースの半分くらいは空けていくと良い。」との助言を忠実に守り、極力無駄な荷物は無いように心がけていました。しかし、このスーツケースに十分な空きを作ることに重点を置いたことで、上着を持参しないという決断をしてしまい、ドイツの寒空の下で後悔することになるとは思いもよませんでした。

【ドイツ】

10月3日、羽田空港発ANA便によりドイツフランクフルト空港へ出発しました。ロシア上空を迂回するルートを飛行するため、所要時間は14時間50分の予定でしたが、予定よりも早い約13時間30分でドイツに到着しました。

空港からバスで一路フライブルグ市へ。メルセデスベンツ製のバス、途中で立ち寄ったドライブインの有料トイレ、車窓から見える風景等、目新しいものばかりが広がる光景に自分が海外にいることを改めて実感しながら、ホテルへ向かいました。

就寝後必ず2時間おきに目が覚めるという不思議なサイクルがこの夜から始まり、これが時差ボケだとわかったのは、研修が終盤に差し掛かった頃のことでした。

10月4日は、最初の公式訪問を行い、バートクロツィンゲン市とフライブルグ市ヴォーバン地区を視察し、道中は鉄道やトラムに乗り、市民団体が運営するコミュニティバスの乗車も体験しました。

バートクロツィンゲン市では、シュタットベルケについて説明を受け、水道や電力事業の利益を不採算部門である公共交通事業に回すという仕組みは、自治体の運営上、非常に有効な手法であり、日本においても地域公共サービス維持のヒントになるのではないかと感じました。

また、市民団体によるコミュニティバスの運営やヴォーバン地区の住宅地形成等といった住みやすい町とするために住民自らが参画して作り上げようとする姿勢にとっても感銘を受け、そこで生活している市民の様子から生活の満足度や、心の豊かさを感じ取ることができました。

秋頃のドイツの気温は北海道と同じくらいと聞いていましたが、出発前の北海道が例年よりも温暖な気温であったことから、前述のとおりスーツケースの空きを作るべく、上着を持って行きませんでした。しかし、この日は雪も一瞬ちらつく冷え込んだ日となり、寒さに我慢ならず、昼食後、近くの衣料品店に飛び込み、帰国しても着ることがないであろうダウンベストを70ユーロ（日本円：約13,000円）で購入することになってしまいました。あのとき、上着をスーツケースに入れておけばと、帰国後、ハンガーに掛けっぱなしのダウンベストを見るたびに苦い思いがこみ上げてきます。

【スペイン】

10月5日、ドイツから空路でスペインへ。人生で一度は訪れてみたかったスペインでしたが、これまで私がスペインとしてイメージしていたのはマドリッド市やバルセロナ市の都市でした。今回の公式訪問として訪れたのは、それとは異なる北スペインに位置するビルバオ市とサンセ

バスティアン市。これまで両都市ともに地名は聞いたことはありましたが、深くは知らず、インターネット等で調べて本研修に参加しました。

ビルバオ市庁舎への公式訪問によって、まさに私のように、多くの観光客がスペインといえはマドリード市やバルセロナ市が連想され、ビルバオ市が観光訪問先として選ばれない現状があることがわかりました。しかし、ビルバオ市では、マドリード市やバルセロナ市を「熟した大人」、ビルバオ市のことを「思春期」と表現し、自分たちの地域のポテンシャルを信じ、マーケティング分析をする中で成長させていこうという熱意がとても印象的でした。情熱をもって、自分たちの街をより良くしていこうという姿勢は、同じ自治体で働く者として、大いに学ぶべき点であったと思っています。

サン セバスティアン市においても、人口が約19万人の規模であるにも関わらず、年間約100万人の観光客が訪れている背景には、長期的な視点を持ち、戦略的に取り組んできた結果、世界有数の美食の街として近年注目を集めるようになりました。スケールは違うものの、まちづくりにおいて、とても参考となるものでした。

ビルバオ市、サン セバスティアン市ともに、バスク地方の自地域に誇りを持ち、たゆまぬ努力によって、観光地としての現在の立ち位置を確立していることに、敬意を感じずにはいられません。



【サンセバスチアンの夕景と団員】

【フランス】

10月9日、研修も残すところあと2日間。エッフェル塔や凱旋門、シャンゼリゼ通りなど、2か月前にパリ五輪の舞台となり、テレビで見ていた各名所に自分が立つことになるのは、思いもよみませんでした。

フランスでは、公式訪問はなく、ヴェルサイユ宮殿をグループ視察し、そのスケールの大き

さと華やかな造りに驚き、日本とは歴史も文化も大きく異なることを直接見て、感じ取ることができたことは、とても有意義な時間となりました。

【帰国】

10月11日、フランス、シャルル・ド・ゴール空港を出発し、羽田空港への帰路につきました。

今回の研修で本当に残念なのが、シャルル・ド・ゴール空港に向かう3時間前あたりから、腹痛と吐き気に襲われ、体調が絶不調のまま帰国したことです。帰りの機内では、研修の終わりを惜しみながら帰国をするといったプランは大きく崩れ、体感的には丸一日は乗っていたのではないかと思うくらい日本が遠く感じました。ただひたすらに「早く日本に着いてくれ」と願いながら、機内で耐え忍んでいました。

さらに、帰国後、羽田に後泊となる参加メンバー達と安着祝いをしようと話していたのですが、その宴席に参加することもできず、ホテルで寝込んでいたことは、かなり大きな心残りとなっています。

【おわりに】

今回の外国派遣研修において、建造物や街並み等から感じさせられるヨーロッパの長い歴史に触れ、日本とは全く違う価値観や文化を学ぶことができました。

事前研修において、柏木団長より「現地の文化や習慣を受入れ、違いを楽しむ。」という心構えをお聞きし、その点を実践しようと研修に臨みました。研修を終えた今、その国や地域の歴史や文化などを事前にもっと徹底的に調べて勉強していけば、違った視点からも感じる事ができ、より深く理解することができたのではないだろうかと思っています。

3か所の公式訪問先に共通して感じたことは、まちづくりに対する情熱です。視察の際は、その自治体の熱意が伝わり、住民も自分たちの住む地域に誇りを持っている様子を感じられました。外国研修から私自身も改めて自分の仕事にやりがいを感じ、誇りやプライドを持って自治体職員として働いていく決意をしているところです。

最後に、本研修に参加されました皆様、快く研修に送り出していただいた職場の方々には心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

外国派遣研修を終えて

池田町 塚田 玲 央

【はじめに】

副町長からお声がけいただき、外国派遣研修への参加を決めました。「ゼロカーボン」や「公共交通」に関連する業務を担当していたことから、「環境・エネルギー政策」「交通政策」「観光政策」をテーマに、各国の先進的な取り組みを直接学べるこの研修は、担当職員としても、また個人の人生経験としても、大変意義深いものになると確信しました。

初めてのヨーロッパということで不安と期待が入り混じる中、研修準備に取り組みました。

【ドイツ・フライブルグ市】

日本を出発し、北極圏を経由する空路でフランクフルト市に到着。その後バスでフライブルグ市へ移動しました。翌日、公式訪問先へ向かう途中、駅のホームには自転車を押して昇り降りできる溝が設置されており、電車内にも自転車を持ち込める設計が施されていました。こうした自転車と公共交通が市民生活に深く根付いている様子が印象的でした。

公式訪問先では、小規模自治体が所有し運営する公営企業「シュタットベルケ」の役割や業務内容、そして公共交通政策について学びました。視察した「Bad Krozingen Stadtwerke」では、水道、電力、ガス、公共交通といった市民生活の基盤を担う事業を手掛けており、その中でも再生可能エネルギーの活用や地域交通の整備に特に力を入れています。また、市の監督のもと独立した会計で運営されており、公共性と経済性の両立を実現している点が特徴的です。

その後、ヴォーバン地区の環境先進住宅地を視察しました。この地区は、再生可能エネルギーの積極的な活用に加え、住民の環境意識を高めるためのさまざまな取り組みが展開されています。例えば、住宅地全体のデザインには、自然環境との共存が強く意識されており、敷地内の至るところに緑化された空間が組み込まれています。建物の壁面や屋上にまで緑化が施されているだけでなく、路面電車の線路には植生を活用した防音・防振対策が行われており、都市機能と自然環境が見事に調和している様子が見受けられました。

さらに、住宅地内では車両の通行を制限し、

駐車場を設けない「カーフリー」の設計が採用されています。このことで、住民は公共交通機関の利用を自然と促され、結果として公共交通の利用者増加による収益性向上と、利便性の向上が同時に達成されています。また、車の侵入が減ったことで、住宅地内の道が子どもたちの遊び場や住民同士が交流する空間としての新たな役割を果たしており、住民生活の質の向上にも寄与しています。こうした環境・交通政策の先進的な取り組みは、まさに持続可能な都市の理想像を体現していると感じました。



【ヴォーバン地区の環境先進住宅地～】

【ドイツ・ハイデルベルグ市】

ハイデルベルグ市は、歴史的な建造物が丁寧に保存され、統一感のある美しい街並みが広がっています。観光客も多く、活気にあふれた街で、通りには土産物店やカフェが並び、賑やかな雰囲気印象的でした。

訪れたハイデルベルグ城では、歴史の重みを感じさせる建物や展示品に触れることができました。特に世界最大級と言われる巨大なワイン樽を目にし、その圧倒的なスケールに驚かされました。この樽は、かつて水よりも安全とされたワインが大量に消費されていた時代を象徴するもので、歴史の一端を垣間見る貴重な体験となりました。池田町で使用している樽とは比べ物にならない規模で、その存在感に圧倒されました。

城内を一通り見学した後、展望台に立ち寄り、街全体を一望しました。ネッカー川に沿って広がる街並みと背後の山々の調和が見事で、街の長い歴史と自然の豊かさが織りなす景色に感動したのを覚えています。こうしてハイデルベルグの豊かな文化や歴史を堪能し、次の目的地へ向かいました。

【スペイン・ビルバオ市】

研修5日目、本来は終日ビルバオ市の視察予定でしたが、前日の夜から体調を崩し、ホテルで休養を余儀なくされました。団員の皆様の温かいサポートのおかげで早期回復することができ、心より感謝申し上げます。

翌日、ビルバオツーリストオフィスを訪問。途中の展望台からは「ビルバオの奇跡」を象徴するグッゲンハイム美術館が見えました。公式訪問では、観光を地域経済の柱とし、多様な観光客への対応や、文化・自然を活かした持続可能な取り組みを学びました。デジタル技術を活用したプロモーションや国際会議の誘致にも力を入れており、「攻めの姿勢」での観光政策が印象的でした。

【スペイン・サン セバスティアン市】

サン セバスティアン市では、観光都市としての発展の背景や公共交通政策について学びました。

同市は美食文化や海岸リゾートを基軸に観光振興を進めており、2016年には欧州文化首都に選定。地域独自の魅力を活かした観光地としての地位を確立しています。特にバスク文化やスポーツ体験を軸に、地元の文化や自然資源を持続可能な形で発信し、観光客の滞在時間を延ばす取り組みが印象的でした。

また、観光振興と並行して進められている公共交通政策では、渋滞緩和や環境負荷の低減を目指し、自転車の利用促進や地下鉄網の整備が進められています。これらの施策は、観光客と市民の双方に配慮したまちづくりを象徴したものとなっています。

一方で、オーバーツーリズムによる物価高騰や住民との摩擦といった課題も顕在化しています。観光地化が進むことで、地域のアイデンティティや住民の生活の質が損なわれるリスクに直面しており、市民目線を重視した持続可能な政策が求められている現状を学びました。こうした観点は、自治体職員としての業務においても重要であり、市民の視点に立った政策形成の必要性を改めて認識しました。

また、研修最後の夜には旧市街のバルを訪れ、多彩なピンチョスを堪能しました。地元産の食材を活かした料理はどれも独創的で、味わい深いものでした。一軒ごとに異なるバルの雰囲気や個性も魅力的で、地元の人々と観光客が一体となり楽しむ様子は、「美食の街」の魅力を体感

できる素晴らしい機会となりました。

食文化だけでなく、街全体が持つ温かみや賑わいを肌で感じる事ができたこの体験は、非常に印象深いものとなりました。



【サンセバスチャン市旧市街でのバル巡り】

【フランス・パリ市】

研修8日目、フランス高速鉄道TGVに乗り、パリへと移動しました。2階建て構造の車両は広々としており、座席も快適で、移動中は車窓からフランスの美しい田園風景を楽しむことができました。約3時間の旅はあっという間で、パリに到着した瞬間から世界的な観光都市の雰囲気に含まれました。

到着後は、エッフェル塔や凱旋門といった名所を巡り、歴史と現代が融合したパリの魅力を実感しました。翌日にはオプションツアーでルーヴル美術館を訪れ、モナ・リザやミロのヴィーナスなどの名作に触れました。その壮大な建物と展示の充実ぶりに圧倒され、芸術と文化の中心地としてのパリを存分に満喫するとともに、歴史の深さを学ぶ貴重な時間となりました。

【おわりに】

当初、長期間の研修に不安を抱えていましたが、あっという間に感じるほど充実した日々が続き、非常に有意義な研修となりました。

事前学習で得た知識を現地で答え合わせしながら進める研修は、見聞を広げる貴重な機会となりました。

今回の研修に推薦していただいた町、送り出してくれた同僚や家族に心より感謝申し上げます。また、本研修を主催した北海道市町村振興協会の皆様、添乗員の畠山さん、現地で対応いただいた方々、そして団員の皆様に厚くお礼申し上げます。今後ともご縁を大切にしていきたいと思っております。

外国派遣研修に参加して

豊頃町 寺本 恭 啓

【はじめに】

豊頃町からは、毎年この研修に職員を派遣していますが、新型コロナウイルスの影響で2019年から行われていなかったこともあり、年齢的に自分には関係のない話と思っていたところ、思いがけず声をかけていただきました。日々の業務に追われ研修の間、職場を離れることに対して不安もありましたが同僚にも後押しされ、本研修に参加することを決心することが出来ました。

【出発まで】

8月の事前研修では研修への心構えや注意事項を確認しました。海外の治安の話に不安な気持ちになり、日本とドイツのフライト時間が約15時間なことにも不安な気持ちとなってしまいました。

研修後は、一緒に参加するメンバーとの懇親会。最初は若い皆さんと上手くやれるか心配でしたが、優しい方ばかりで一安心しました。

研修に持っていく消耗品等を準備しているうちに、まだ先と思っていた外国研修もとうとう明日に。忘れ物がないのか何度も確認するものの、心細い気持ちはなくならないまま旅立つこととなりました。

【ヨーロッパ着】

フライトの時間の長さが心配でしたが本を読んだり映画を見たり、飲み食いしたりと過ごしていると思いのほか苦も無く到着。

こちらの時間で17時くらいなので、日本時間だと夜の11時くらいのはずなのに、緊張しているからか眠気もありませんでした。車窓から眺める景色に日本との違いを感じながら、研修が始まったことを実感しつつ、その日は次の日に備えてビールも飲まず寝ることにしました。

【ドイツ】

時差ボケの影響もほぼなく、朝食をとりましたが、外の暗さにビックリ。改めて外国に来たことを実感しました。

公式訪問先のバート クロツィンゲン市ではシュタットベルケによる公共交通を中心に講話をいただき、その後実際にコミュニティバスに

乗せていただきました。

道内の各市町村でも地域交通の確保は課題となっています。バート クロツィンゲン市では、地元貢献したいとの思いから多くの方がスタッフとして参加してくれるとの話を伺い、交通施策に限らず地域一体となってまちづくりに取り組む必要性を感じました。

夕食までの空き時間にフライブルク大聖堂を見学。「地球上でもっとも綺麗な塔」と称されたこともあるそうで、期待通りの荘厳なたたずまいに感動。

ドイツの景色を満喫した後の夕食、期待していたドイツのビール、やっぱり美味しい、本場ドイツで飲んでいると思うとますます美味しい。ただ、食べ物がかなり塩辛かったのが印象的でザワークラウトの酸味が有難かった。

2日目はハイデルベルグ城を視察。ドイツの歴史を感じさせる旧市街を散策しているうちにスペインに移動する時間に。フランクフルト空港でドイツ最後のビールを飲んで、空路スペインへ。

【スペイン・ビルバオ】

スペイン初日の午前中はビルバオ港を視察。街中で行われていたピンクリボンの集会に多くの市民の方が参加しており、市民活動への意欲の高さに驚かされました。

ビルバオのまちづくりの象徴ともいえるグッゲンハイム美術館も視察。現代美術は難しい。

2日目は公式訪問先のビルバオ市で観光施策と環境・交通施策についてお話を伺いました。

観光については、自分たちの文化に誇りを持ち、他地域との差別化を図っており、自らの強みを認識し、他者との違いをアピールすることの重要性を認識しました。

環境・交通施策については健康寿命を延ばすことを目指して、高低差のある場所でも徒歩・自転車による移動が出来るよう市内にオートスロープやエレベーターを設置する等、自家用車の利用率低減に係る取り組みを進め、市民の健康にもつながっているとのことでした。ヨーロッパに来てから自転車を乗せた車を見かけることが多く、健康や環境に対する意識の高さを感じました。

【スペイン・サン セバ스티アン】

3日目は美食の町サン セバスティアンへ。

サン セバスティアンは高級避暑地といった街並みで、こちらまでなんともお洒落な気持ちにさせられます。

4日目の公式訪問では観光・交通施策について研修し、観光では美食等のバスク文化を中心にワンランク上の観光地を売りとしていること、交通に関しては自家用車中心のまちづくりから徒歩・自転車中心のまちづくりに転換してきていることを伺いました。

夕食はバル巡りです。ただ、ヨーロッパは時間をかけて昼食を食べる文化なのか毎回食べ過ぎてしまいます。この日もうっかり食べ過ぎ、お腹が満たされている状態でバル巡りに。それでも、3店でピンチョスを食べ、バスク地方名産の「チャコリ」も楽しむことが出来ました。

4日目はフランスへの移動日。

移動手段は子供のころ本で見ていたTGVです。後ろ向きに走り始めたので、途中で進行方向が変わるのかと思っていたら、そんなことはなくずっと後ろ向きで移動。せっかくの高速鉄道なのにスピード感が分かりにくい。

また、ドイツでも気になっていたのがバスの時計があっていないこと。スペインで乗ったバスもみんなずれていて、こんなところでも日本との違いを実感。



【ピンチョス】

【フランス】

残念ながら天気は雨模様。それも、雨の少ないフランスでは記録的な大雨です。ホテルまでの移動の間エッフェル塔や凱旋門前を通りましたが、車中からははっきりと見る事ができず、それでも煌びやかな街並みは素敵です。

夕食までの空き時間を利用してお土産を購入。まだ、時間があったので地下鉄を利用して「ギャ

ラリー・ラファイエット」まで足を延ばすことにしました。ところが、ここで問題が、地下鉄の出口がわからず構内を歩き回ること。何度か人に教えてもらって、なんとか帰って来ることができましたが思いがけず小さな冒険となりました。一緒に行ってくれた小里さん、ありがとう。大変お世話になりました。

次の日は、天気も回復しヴェルサイユ宮殿の視察へ、煌びやかな宮殿を見て高貴な気持ちになっているうちに、帰国の途へ。

参加する前は長いかと思っていた外国研修でしたが、いざ始まってみると瞬く間に時間が過ぎ、本場の生ハム、チーズ、ビール、ワイン達に後ろ髪を引かれる思いでフランスを後にしました。

【最後に】

今回の外国研修でヨーロッパの日本とは異なる歴史を感じさせる街並み、食事等の文化を五感で感じる事ができ非常に大きな経験となりました。

また、まちづくりに関しては行政のみではなく、そこに暮らす人々が自分の住む街に誇りを持ちながら「自分たちの町は自分たちでつくる」といった想いで地域一体となって取り組んでいることを感じました。ヨーロッパには民衆が自分たちで権利を勝ち取ってきた長い歴史があり、自分の自治体で簡単に実現できるものではありませんが、今後まちづくりを進めるうえで重要なものを得ることが出来たと思います。

最後に、北海道市町村振興協会の皆様、添乗員の畠山さん、各地での通訳の皆様、各町村からの参加者の皆様、長期にわたり研修に送り出してくれた職場の皆様に感謝とお礼を申し上げます。



【自転車を積んだ車が多い】

外国派遣研修に参加して

鶴居村 小林 弘 昌

【はじめに】

鶴居村では、隔年でこの外国派遣研修に参加させていただいておりますが、コロナの影響もあり最後に参加させていただいたのが、平成30年度となっております。鶴居村からは6年ぶりの参加となります。

この研修に参加するに当たっては、10月2日から11日の10日間の旅程ということで、既にこの期間に出張が決まっていたこともあり当初は参加するつもりはありませんでしたが、外国派遣研修に参加したことがある上司や同僚からは折角の機会なので仕事は何かするから行ってみたらと背中を押してもらったので、他の職員に迷惑を掛けてしまう後ろめたさと、行ったことの無いヨーロッパへの期待が交錯していましたが、正式に参加が決まってからは気持ちを切り替え出発までの間に仕事を前倒しで処理することに集中しました。

【事前研修と出発準備】

事前研修については、自己紹介や視察研修の意義、視察先の説明が行われた後、参加者総勢12名を地域の近い4人のグループに分け、班での役割分担を決め初日の研修は終了し、夜の交流会では最初は班ごとに近くの席に集まり海外に行ったことがある、初めての海外になる等の話しをしていましたが、2次会以降は他の班の方々とも色々な話しをでき、とても有意義な事前研修となりました。

【出発日前日と出発】

参加者全員が出発前日に同じホテルに宿泊し団結式が行われました。その際にはみんなが何を持ってきたのかが話題の中心となり、海外では水が1本500円程度すると話しを聞き、団結式後に近くのコンビニで水とお茶を数本ほど買って持っていくこととしました。

出発日当日は先日に少し飲みすぎたこともあり若干二日酔いの方と、ゆっくり休んでとても元気な方といましたが、出国直前には時間も経過していたこともあり皆が元気に出国となりました。ドイツまでの飛行時間はロシア・ウクライナ戦争の影響でロシア上空を飛行できないことにより、通常時より2時間ほど長い約14時間の

フライト時間となりました。飛行機内の座席については旅行会社の方で配慮をいただいたこともあり、隣の席には誰も居なくゆったりと過ごすことができました。

【ドイツ】

長いフライトも終わりいよいよドイツへ入国することとなり、最初の難関である入国審査がありどのようなことを聞かれるのか少し緊張していましたが、添乗員の畠山さんが全て説明していただいたため、パスポートの確認のみで入国することができました。空港からホテルまではバスで約3時間の移動となり、道内での長い移動には慣れているものの、立て続けの移動のためバスの中では最初はみんなと話をしていたものの日が暮れるにつれて眠気が襲ってきましたが、時差ボケを早く解消したい思いもあり極力眠らないように車窓から外の景色を眺めていました。走行している車がベンツ・BMW・フォルクスワーゲンなどの外車が多く、これは外車ではなく国産車だと思い改めてドイツに来たなと思い走っている車を眺めて移動時間を過ごしていました。

最初の研修はバートクロツィゲン市で行われている「シュタットベルケ」という企業体の仕組みやフライブルク市の「ヴァーボン地区」で取り組まれている環境政策を研修させていただきました。シュタットベルケについては、赤字事業を持続的な事業とするために黒字事業と連動して行う仕組みであり、バートクロツィゲン市で課題となっている公共交通事業を持続的に行っていくために、黒字事業である電気事業等と併せて運営を行うことにより、不採算事業の公共交通事業を持続させることに成功していた。ただし、公共交通事業については人員確保も課題の一つとなっており、現在は退職された住民がボランティアで運行を担っている状況であり、今後はこういった方々に事業の趣旨を理解していただくためのPR強化をしていかなければ担い手不足に陥ってしまう可能性もあるとの説明があり、収支だけの問題ではなく地域住民の意識醸成がとても重要なことだと感じた。

ヴァーボン地区については住民提案型のまちづくりを行っており、環境問題への取り組みは日本国内での様々行われているが、子どもから高齢者までが住みやすいまちづくりが展開されており、その中の一つが住宅街への車両侵入を禁止することにより、家の目の前の道路で子ど

もが安心して遊べる空間や住民の集う場を創ることを行っていた。家の前まで車で行けなくなる不便さよりも、子ども達が健やかに育ってほしいという地域住民の思いが込められた政策であった。

【スペイン】

2日目と3日目はビルバオ市及びサンセバスチャン市での研修となり、主に観光戦略や交通政策の研修を行い、ビルバオ市では世界的に注目を浴びている「ビルバオの奇跡」と呼ばれる観光政策についての説明を受け、一番の起爆剤となったグッゲンハイム美術館の誘致が成功したことにより、文化芸術都市へと発展していくこととなり、現在では毎年、国際映画祭の開催やバスク文化を上手く観光へと繋げており、新しい取り組みと以前からある良いものを上手く融合させた観光戦略が行われていた。

サンセバスチャン市においては、世界的なリゾート地として発展しており、特にバスク料理と美食のまちとして注目されている。食としてはバルで提供されるピンチョスやシードル・チャコリ等様々な伝統的美食がそろっており、それ以外にも様々な国際イベントやスポーツイベントが行われており、ワンランク上の観光地を目指した戦略を展開している。観光地として成功したもののそれに伴い観光客の増加による住民との不和や交通の問題も浮き彫りになってきたことから、観光で増えた収入をインフラ整備に回すことにより、住民の利便性の向上や住民を大切にしたまちづくりを行っていた。研修日の夕食は直接食文化に触れるために各班に分かれてバルに繰り出し、慣れない言葉を駆使し、ピンチョス等を食すことができました。



【スペインでの夕食のピンチョス】

【フランスでの自由時間】

パリでは若干の自由時間を設けていただき、折角パリに来たのだからと無謀にもパリの地下鉄にチャレンジを試みたが、目的地までは添乗員の畠山さんからの説明を受けたどり着くことができたが、帰りは時間も無かったこともありホテルまでタクシーで帰ることとしたが、パリで地下鉄に乗れたことはとても貴重な体験であった。

【おわりに】

今回の研修は不慣れな海外での行動や、初めて会う方との集団行動と様々な不安があったものの、参加された皆さんがとても良い人ばかりでとても充実した研修をさせていただくことができました。人口規模の違い等はあるが問題に取り組む海外の職員の方々の姿勢や、どのように住民と協働のまちづくりを行ってきたかなど大変参考になる事例を研修させていただきました。この研修では様々な事例を勉強させていただいたことはもちろんのこと、普段の仕事では知りあう事の出来なかった各町村職員の皆様や振興協会や関係者との繋がりを作れたことが一番の財産になったと思います。

最後の本研修の企画立案や現地での取りまとめ等行っていた振興協会や関係者の皆様、添乗員の畠山さんや各町村から参加された皆様、また、研修参加に当たりご理解いただいた職場の皆様に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



【イゲルド山展望台（スペイン：サン セバスティアン）】



【ゲルニカの壁画（スペイン：ゲルニカ）】



【エッフェル塔（フランス：パリ）】

令和6年度市町村職員外国派遣研修 実施報告書

発行：令和7年3月

編集・発行：公益財団法人北海道市町村振興協会

この研修は市町村振興宝くじ（サマージャンボ等宝くじ）の収益金を活用して実施しています。

